国分寺市文化財調査報告　第39集

武蔵国分尼寺跡 I

平成4年度発掘調査概報

1994

国分寺市教育委員会

序

武蔵国分尼寺跡は、武蔵国分寺跡とともに大正11年に国の指定を受けた史跡であり、国分寺市の主要遺跡として、また古代武蔵国の歴史を知る上で重要な遺跡です。

国分寺市教育委員会では、歴史遺産と自然環境に恵まれた史跡を「歴史のまち国分寺」のシンボルとして多角的に活用できるように、昭和62年から平成２年にかけて保存管理計画、整備基本構想、整備基本計画を各々策定しました。

これらにもとづき、平成４年度から尼寺地区をさきがけとして環境整備事業の一環として、主要遺構の確認調査を国庫及び東京都の補助事業として実施することとしました。

今回の調査では、推定金堂の規模を確定し、さらに推定中門を発見するなどの大きな成果を上げることができました。これらを今後の史跡整備に生かしていきたいと考えています。

調査にあたりましては、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導、御助言を賜り、また地元住民をはじめ関係各位の御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

調査は５年度以降も継続いたしますので、今後共宜しくお願い申し上げます。

平成６年３月

国分寺市教育委員会

例　　言

1．本書は東京都国分寺市西元町に所在する国指定史跡武蔵国分寺跡（尼寺地区）の史跡環境整備事業に伴う発掘調査の概要報告である。発掘調査は文化庁と東京都の補助を受け、国分寺市教育委員会が調査主体となり、国分寺市遺跡調査会が調査を担当した。

2．調査は武蔵国分寺跡第373次調査として、平成4年5月1日から平成5年3月15日まで（現場における作業は平成4年6月1日から平成4年12月26日まで）、買収地内において、面積956㎡の範囲について実施した。
出土遺物・写真・図面等へは遺跡略称のMKを冠し、「MKⅢ-373-以下　台帳番号、登録番号」のように注記してあり、全て国分寺市教育委員会で保管している。なお、出土遺物は瓦類を主としてコンテナ88箱である。

3．図面中の方位は特記以外は僧寺中軸線を基準とした極地座標北を表示している（詳しくはⅢ－1参照）

4．遺構断面図の水糸高は特記以外は全て海抜標高66.0mに統一した。

5．遺構断面図における地山のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

Ⅲb層　Ⅲc層（ローム漸移層）　Ⅳ・Ⅴ層（ローム層）

6．遺構記号は下記のとおりとし、Pを除いて第1次調査より連続番号を与えている。

SA　塀跡・柱列跡　SB　礎石建物跡・掘立柱建物跡　SD　溝跡　SF　道路跡
SK　土坑　SI　住居跡・工房跡　SX　特殊遺構　P　小穴・小柱穴

7．遺物記号は次のとおりとし、調査次数毎に連続番号を与えている。本書においては実測図と写真図版の下段に表示した。なお、遺物には黄色ポスターカラーで注記してある。

PK　須恵器　KA　瓦　KB　宇瓦　KC　男瓦　KD　女瓦　KH　塼

8．発掘調査から概報作成にいたるまで、下記の方々より御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

田中哲雄・増渕徹（文化庁）、大谷猛・早川泉・福田健司・高林均（東京都教育委員会）、上野佳也・三橋正（大正大学）、吉田章一郎（青山学院大学）、須田勉（国士館大学）、木下正史（東京学芸大学）、吉田恵二（国学院大学）、大脇潔（奈良国立文化財研究所）、松田真一（奈良県立橿原考古学研究所）、佐口節司・木村弘之（磐田市教育委員会）、桐生直彦（多摩市教育委員会）、山路直充（市立市川考古博物館）、辻史郎（早稲田大学）、石村喜英（仏教考古学研究所）、大橋泰夫（栃木県埋蔵文化財センター）、斎藤光利（栃木県南河内町教育委員会）、須田誠・服部みはる（海老名市教育委員会）、松田隆夫（府中市郷土の森博物館）、雪田孝・荒井健治・塚原二郎・和田信行・江口桂（府中市教育委員会）
黒鐘自治会、府中市立武蔵台小学校、国分寺市立第4小学校

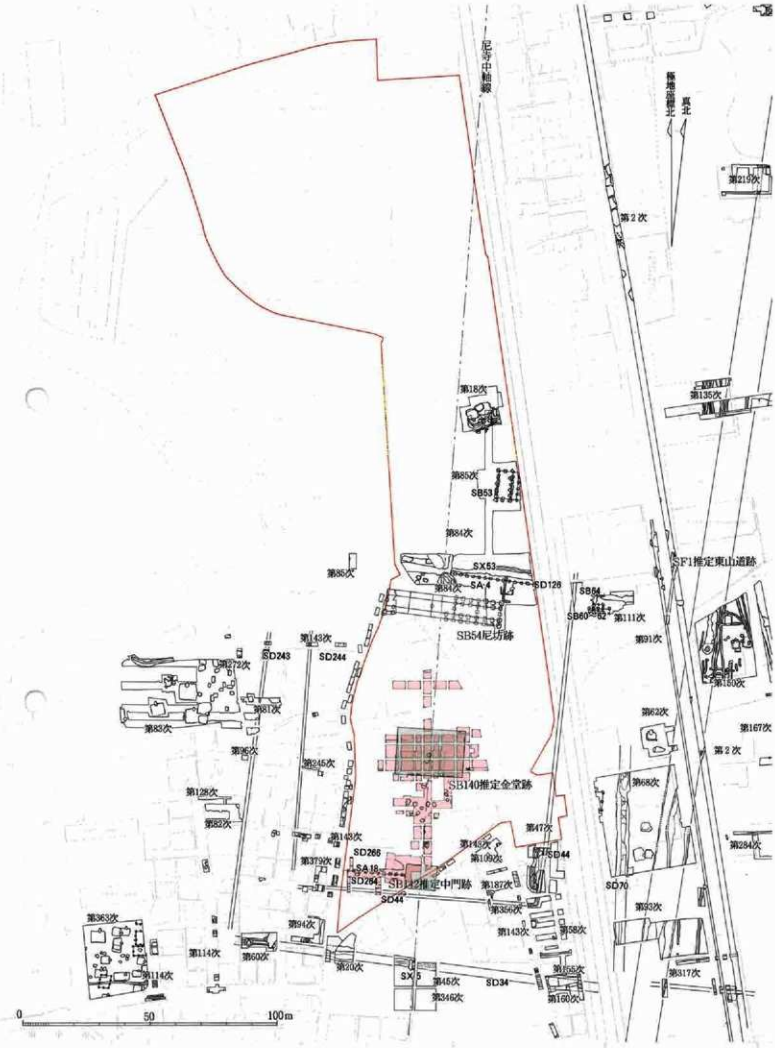
9．平成4年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体　東京都国分寺市教育委員会
調査担当　国分寺市遺跡調査会

役員および監事	会　長	星野晃勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
	副会長	吉田　格	国分寺市文化財保護審議会委員
	理　事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
		坂詰秀一	〃
		大川清	国士館大学教授
		本多良雄	国分寺市長
		内野孝治	国分寺市教育委員会教育委員長

		高橋俊司	国分寺市教育委員会教育長
		星野亮雅	国分寺市社会教育委員会議議長
		藤間恭助	国分寺市文化財保護審議会委員
		本多寅太郎	〃
		松井新一	元　〃
		仲地聰	東京都教育庁生涯学習部文化課副参事
		関隆成	国分寺市教育委員会社会教育部長
	監　事	榎戸潔	国分寺市社会教育委員会議副議長
		渡辺芳郎	東京都教育庁生涯学習部文化課埋蔵文化財係長
武蔵国分寺跡調査・研究指導員会			
	委員長	吉田格	（考古）
	委　員	永峯光一	〃
	〃	坂詰秀一	〃
	〃	大川清	〃
	〃	宮本敬	（古代史）
	〃	金丸義一	（建築史）
事務局	事務局長	野口武夫	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長
	事務局員	宇都宮精一	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長
		鈴木晃	〃　〃　庶務係員
		藤倉しのぶ	〃　〃　〃
		松澤修	
調査団	団　長	吉田　格	（前出）
	主任調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長
	調査員	福田信夫	〃　文化財保護係員
		上村昌男	〃　〃
		上敷領久	〃　〃
		滝島和子	〃　嘱託遺跡調査員
		板倉敏之	〃　〃
	調査補助	木下さおり・井口正利・赤須敏夫・小池和彦・荒順・宮澤勝敏・鈴木靖彦・木	
	(373次)	村光伸・岩崎智洋・増田政之助・中田一夫・斉藤光司・多田多文治・野村巌・	
		藤崎努・森安敦子・原田嘉枝・井上寧・宮沢高司・山本克・小山智	
		川岸満子・山岸加寿子・大下ゆみ・桑名俊子・相馬しのぶ・永尾美智子・浅見	
		輝代	
	研修生	内藤亮（法政大学大学院）	

10. 本書の編集・執筆は吉田格団長の監修のもとに、Ⅰを主任調査員有吉重蔵が、Ⅱ～Ⅵを担当調査員福田信夫が分担執筆した。



第1図　武蔵国分尼寺跡全体図

目　　次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過と調査計画 …… 1
Ⅱ　尼寺跡の環境と既往の調査 …… 4
　1　位置・立地と周辺の遺跡 …… 4
　2　調査のあゆみと現状 …… 6
　3　層序 …… 8
Ⅲ　調査の経過 …… 9
　1　調査方法 …… 9
　2　調査日誌抄 …… 11
Ⅳ　調査の概要 …… 14
　1　講堂地区 …… 14
　2　金堂地区 …… 15
　3　金堂前面地区 …… 21
　4　中門地区 …… 23
Ⅴ　出土遺物 …… 28
　1　土器類 …… 28
　2　瓦塼類 …… 29
Ⅵ　まとめ …… 39

挿図目次

第1図　武蔵国分尼寺跡全体図
第2図　武蔵国分尼寺跡位置図 …… 3
第3図　調査基準線の設定 …… 9
第4図　4年度調査区遺構配置図 …… 13
第5図　講堂地区　深掘区断面図 …… 14
第6図　金堂地区全体図 …… 16
第7図　SB140推定金堂跡　掘込み地業断面図①（DM119区） …… 17
第8図　SB140推定金堂跡　掘込み地業断面図②（DQ123区） …… 17
第9図　SK1309土坑断面図 …… 19
第10図　SX107不明落込み断面図 …… 19
第11図　ＤＰ118・119区礫石出土状況・断面図 …… 19
第12図　金堂前面地区全体図 …… 20
第13図　SX94掘立柱遺構断面図 …… 21
第14図　SX97掘立柱遺構断面図 …… 22
第15図　SX102掘立柱遺構断面図 …… 23
第16図　中門地区全体図 …… 24

第17図　SB142推定中門跡　掘込み地業断面図 …… 25
第18図　SA18塀跡　柱穴4断面図 …… 26
第19図　SD44・264溝跡断面図 …… 26
第20図　出土土器実測図 …… 29
第21図　出土瓦・宇瓦実測図 …… 30
第22図　SX102出土宇瓦実測図(1) …… 32
第23図　SX102出土宇瓦実測図(2) …… 33
第24図　出土男瓦実測図 …… 34
第25図　出土女瓦実測図(1) …… 35
第26図　出土女瓦実測図(2) …… 36
第27図　出土女瓦実測図(3)、出土塼実測図 …… 37
第28図　武蔵国分尼寺中枢部建物配置図 …… 39
第29図　武蔵国分僧寺・尼寺全体図 …… 42

写真目次

写真1　昭和22年撮影（極東米軍）　空中写真
写真2　昭和39年3月、造成を免れた土壇北側を試掘、松の根元で版築土を確認
写真3　発掘着手時状況（金堂地区）
写真4　遺跡見学会（中門地区）
写真5　文化庁調査官視察

図版目次

図版1　1　武蔵国分尼寺付近航空写真（南から）　2　調査区全景垂直写真
図版2　1　調査区全景（東から）　2　SB140推定金堂跡（東から）
図版3　1　SB140推定金堂跡版築土　2　SB140推定金堂跡残存土壇上の状況
3　SB140推定金堂跡掘込み地業立上がり　4　DP118・119区礎石状況
図版4　1　金堂前面地区全景（北から）　2　SX94掘立柱遺構東西土層断面東半部（南から）
3　SX97掘立柱遺構南北土層断面（東から）　4　SX102掘立柱遺構（南から）
5　SX102掘立柱遺構南北土層断面（西から）
図版5　1　中門地区全景（北から）　2　SB142　推定中門跡掘込み地業断割り
3　SA18塀跡柱穴4南北土層断面北半部(東から)　4　SD264溝跡南北土層断面（東から）
5　SD44溝跡南北土層断面（東から）
図版6　出土土器・瓦・宇瓦・男瓦　（土器のみ1:3、他は1:4）
図版7　SX102出土宇瓦(1)
図版8　SX102出土宇瓦(2)
図版9　出土男瓦・女瓦
図版10　出土女瓦・塼
図版11　出土文字資料集成(1)
図版12　出土文字資料集成(2)

Ⅰ　調査に至る経過と調査計画

天平13（741）年の詔により鎮護国家の招来を目的に諸国60余国に建立された国分寺は、僧寺（金光明四天王護国之寺）と尼寺（法華滅罪之寺）が併置され、国府とともに地方統治のための重要な機関であった。

武蔵国分寺跡は江戸時代末期より文字瓦等の出土で注目され、明治36年の重田定一及び柴田常恵の実地踏査成果をもとに、大正７年の沼田頭補、さらには大正９年の東京帝嘱託高橋源一郎等による追従調査によって遺構の良好な保存が明らかになり、大正11年10月12日に「史蹟名勝天然記念物保存法」による国の史跡指定を受けるとともに翌年の12月13日に当時の国分寺村が管理者に指定された。

史跡の指定範囲は、実地踏査成果をもとに地上観察によって確認された礎石および古瓦の集中する地域を取り込む形で選定されており、指定面積は約94,181.7㎡である。また、指定直後の現状調査にもとづいて礎石の残存する僧寺の金堂・講堂跡と塔跡の一部約 5,019㎡が指定の翌年に国有化されている。

武蔵国分寺の発掘調査は昭和31年に始まり、33・39～41・44年と断続的に行われてきたが、尼寺跡の住宅化を契機に昭和39～41年まで行われた発掘調査では僧・尼両寺域の計画配置が想定されるなど多大な成果を挙げている。

この間、昭和40年から史跡公園化を目標に指定地の公有化事業が始まるとともに翌年に市議会において「史跡公園促進特別委員会」が設置され、文化庁の指導のもとに昭和46年から３ヶ年計画で環境整備第１期工事として僧寺跡中枢部の 9,963㎡を対象に工事が実施された。ところが、市立第４中学校建設に端を発する武蔵国分寺の広域保存をめぐる混乱のさなか史跡整備の方法が問題となり、保存運動の争点の一つになったことから、整備工事は最終の昭和48年予定の金堂基壇復原工事を中断し、翌年、整地及び案内板設置等の工事を行い区切りをつけた。

武蔵国分寺の広域保存をめぐる混乱は、昭和49年に国分寺市の武蔵国分寺跡保存基本方針表明を受けて終息したが、以後、この方針を基に文化財課の新設や学芸員の増員、あるいは武蔵国分寺遺跡調査会による広域調査の開始、さらには整備計画策定委員会の条例設置（昭和54年）による史跡整備・博物館建設計画の策定着手などの努力が払われてきた。

その中で、史跡整備は昭和49年に開始された第１期調査（寺地・寺域確認を目的）が昭和61年に終了したことで武蔵国分寺の整備・保存に向けての準備が整い、市長期総合計画に基づいて昭和62・63年に保存管理計画、平成元年に整備基本構想、平成２年に整備基本計画を各々策定した。この過程で、史跡指定面積は３回の追加指定などによって平成２年度末現在で約 103,211㎡（僧寺は80,585㎡、尼寺は22,626㎡）であることが明らかになった。

整備基本計画では、歴史遺産と自然環境に恵まれた武蔵国分寺跡を「歴史のまち国分寺」のシンボルとして多角的に活用できるように、史跡公園と（仮）郷土博物館を一体的に整備すること、整備のイメージを「国分寺崖線の緑を借景とし、壮大な武蔵国分寺の伽藍をイメージした史跡公園」及び「広く市民に親しまれるふるさと公園」とすること、伽藍が最も整った段階を整備の設定年代とすること、等を整備方針の基本理念とし、さらに整備の各部計画では、史跡指定地全域を僧寺跡の４地区と尼寺跡の２地区の計６地区に区分し、各地区の立地条件、特色を生かした整備を行うこと、実施時期は、とりあえず尼寺のほぼ全域と僧寺の中心地域を短期整備計画の対象地として平成４～11年の予定で尼寺跡、僧寺跡の順に進めること、等が提示された。

そこで、平成３年度に環境整備事業着手に向けて文化庁・東京都と協議を行ったところ、平成４年度から尼寺跡を対象に事業に着手することになった。

尼寺跡環境整備事業の着手に当たっては、宅地化のために設計の基礎資料となる主要遺構の発掘資料の蓄積が

不十分であったことから工事に先行して確認調査を行うこととしたが、確認調査を含めた事業計画は次の通りである。

平成４年度……整備に先行する発掘調査その１

調査目的は尼寺跡主要道構（講堂、金堂、中門、南大門、中枢部南面区画塀、古寺域南辺区画溝）の確認及び中軸線の確定。

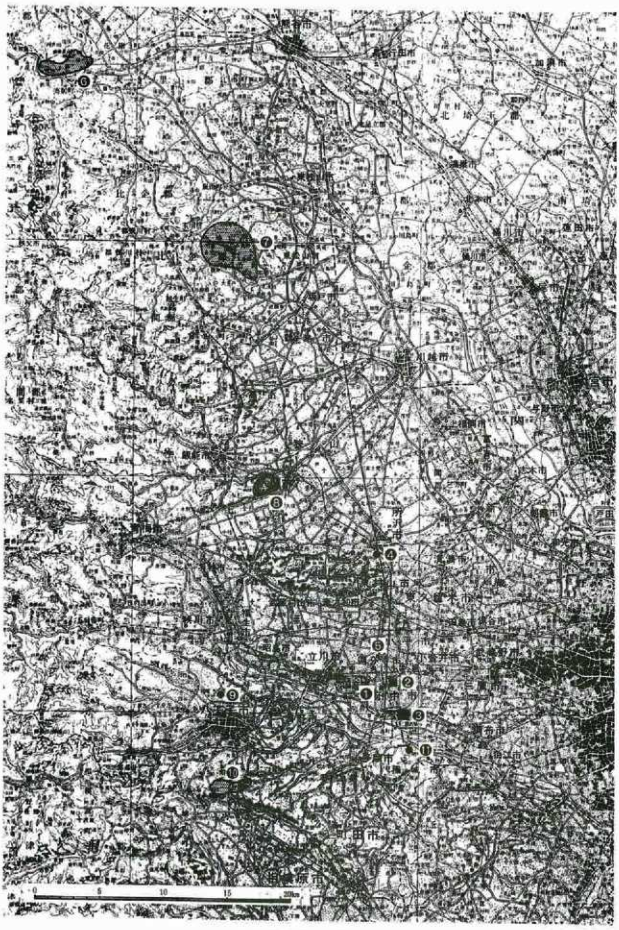
平成５年度……整備に先行する発掘調査その２

現況測量・基本設計

調査目的は尼寺跡主要道構（鐘楼、経蔵、中枢部東面区画塀、古寺域北辺・東辺区画溝）及び伝祥応寺跡の確認

平成６年度……実施設計・整備工事その１（北方地区）

平成７年度……実施設計・整備工事その２（金堂・講堂地区）



第2図武蔵国分尼寺跡位置図

1武蔵国分尼寺　2武蔵国分僧寺　3武蔵国府推定地　4所沢市東の上遺跡　5東山道武蔵路推定ルート(酒井清治1993「武蔵国内の東山道について」『国立歴史民俗博物館研究報告　第50集』による)　6～11は武蔵国分寺造瓦窯　6末野窯跡群　7南比企窯跡群　8東金子窯跡群　9谷野窯跡(南多摩窯跡群)　10御殿山地区窯跡群(南多摩窯跡群)　11大丸窯跡(南多摩窯跡群)

Ⅱ　尼寺跡の環境と既往の調査

1　位置・立地と周辺の遺跡

位置・立地

武蔵国分寺跡は東京都国分寺市西元町一帯に所在し、推定東山道を挟んで東に僧寺跡、西に尼寺跡がある。

国分寺市は、人口10万、面積11.4㎢あり、都心からＪＲ中央線で30分前後という東京近郊にあって、急激な都市化の波を受けている多摩地域の小都市である。市の位置は、北緯35°42′、東経139°28′で、東京都のほぼ中央にあたり、東は小金井市、南は府中市、国立市、西は立川市、北は小平市に隣接する。

市域は関東平野の南西部に位置する武蔵野台地上にある。西の関東山地・多摩丘陵から、東の東京低地に至るまで西高東低の断面を示すなかで、市域の海抜標高は、55m～92mを測る。　武蔵野台地は青梅市付近を頂点として扇形に形成された国内最大級の洪積台地で、北東を荒川、北西を荒川支流の入間川、南を多摩川の各河川と沖積低地により範囲を画されており、東西50km、南北20kmを測る。台地は古多摩川が形成した河岸段丘で、台地の大半を占める高位の武蔵野段丘と、その縁辺にあってより低位の立川段丘とに分かれる。海成層（上総層群）を基盤として、武蔵野段丘面では、武蔵野礫層、武蔵野ローム、立川ローム、表土（黒色土）の順、立川面では、立川礫層、立川ローム、表土（黒色土）の順に堆積している。

武蔵野段丘の南縁は立川段丘との比高差最大20mの段丘崖であるところの国分寺崖線となっている。崖線は武蔵村山市残堀付近から始まり、国分寺跡付近で高さ10mとなり、二子多摩川へと続く古多摩川の側方浸蝕崖である。崖線は、立川、国立、国分寺市域を北西から南東へとほぼ直線的に通過するが、国分寺市西元町四丁目付近を起点に、小金井市前原付近を最奥部として、府中市浅間山をコンパスの軸とした円弧を描くように、大きく湾曲して浸食されている。

写真１　昭和22年撮影（極東米軍）空中写真

武蔵野段丘上には古多摩川の名残川が形成した開析谷が幾筋も見られる。国分寺市恋ヶ窪付近から北西方向に奥深い谷が二筋あって、崖線の手前で会する。ＪＲ中央線国分寺駅と西国分寺駅間の北、日立中央研究所構内の湧水群が野川の源である。野川は、崖線直下の湧水をさらに集め、およそ20km立川段丘上を東流して多摩川に注ぐ。

立川段丘上にも崖線に沿って野川の支谷（黒鐘谷）がある。国分寺市西元町四丁目（黒鐘公園）付近を源とし、現国分寺裏山や真姿の池の湧水群を集めて、東元町三丁目の不動橋付近で野川本流に加わる。

国分寺、府中、小金井周辺の立川段丘面には、幾つかの細長い凹地が認められている。このうちの一つが西元町付近から始まり、府中市幸町、東京農工大農場、天神町、浅間山を経て、野川へと弓なりに続いている。東京農工大農場から東方では、地表形態で凹地の北に比べ南が１m以上低く、小崖が形成されている。凹地を挟んで礫層の上にのるローム層

位に差が認められ、立川段丘面（TC）をtc1面とtc2面とに区分出来るという。（松田隆夫・大倉利明1988「立川段丘と凹地地形について－府中市周辺の立川面の区分について－」『府中市郷土の森紀要第一号』所収）tc1面の規模は東西6㎞、南北2㎞で、ちょうど東西に長い木の葉状を呈する。

僧尼寺は立川段丘上、tc1面の崖線寄りに主要伽藍を置き、寺地は武蔵野段丘の縁辺を取り込み、およそ東西900m、南北550mの範囲におさまる。尼寺の位置は丁度木の葉の西側先端部附近にあたり、北を崖線直下の黒鐘谷、南をtc2面との境をなす凹地に挟まれた平坦地に立地している。

周辺の遺跡

野川流域には先土器・縄文時代遺跡が多く分布する。市内では多摩蘭坂、熊野郷、殿ヶ谷戸などの先土器時代遺跡、多喜窪、八幡前、恋ヶ窪、羽根沢、恋ヶ窪東、恋ヶ窪南、花沢西、花沢東、本町（国分寺村石器時代）などの縄文時代遺跡が知られている。市外では、尼寺西方の府中市武蔵台遺跡は先土器から縄文時代にかかる大規模な遺跡である。国分寺跡の下層には、多喜窪遺跡（早期、中期）をはじめとする先土器・縄文時代遺跡が重なる。僧寺東方の立川段丘上に立地する八幡前遺跡（後期、加曽利B式期）を最後に縄文時代遺跡は消滅する。

以降、奈良時代に至るまでの間は、殆ど空白期である。唯一、弥生時代中期前半期の土器3個体が、武蔵野段丘上の花沢西遺跡より出土していて、野川流域における弥生文化流入期の様相の一端を示している。

立川段丘面の南縁は高さ10mほどの府中崖線によって沖積低地とに画されている。国分寺より約2㎞の距離である。その縁辺には7世紀代に遡る自然集落が確認されている。以後、7世紀末～8世紀初頭に国衙が設定され、8世紀前半に成立したと考えられている（第2図3）。国衙推定地は大国魂神社境内及びその東方一帯の「京所」と呼ばれているところに位置し、国衙を取り巻く国府や街並は国衙の北側一帯にひろがっていたものと推測されている。武蔵国府域は東西約3.7㎞、南北約1.2㎞を最大の範囲とされる。これまでに2000軒に近い竪穴住居跡と400棟ほどの掘立柱建物跡等々が発見されている。（府中市遺跡調査会1986『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅶ』）

古代東山道武蔵路に比定される両側溝を有する幅12mの道路跡が武蔵国府の西方から僧尼寺間を貫いて北上し小平市境まで約4.2㎞が確認されている（第2図5）。北約10㎞に位置する狭山丘陵東端の所沢市東の上道跡（第2図4）において延長部分が発見され、道路の築造時期について側溝並びに硬化面上出土須恵器の年代観から7世紀第3四半期と報告されている。

国分寺崖線の崖腹には、内藤新田横穴墓（内藤1丁目、1基）、多喜窪横穴墓群（西元町2・4丁目、2基）が確認されている。真姿の池上横穴墓（仮称、西元町1丁目、1基）なども道路工事で発見されており、さらに多数の横穴墓の存在が予測される。この内、内藤新田横穴墓は副葬品などから8世紀、多喜窪横穴墓群の内の1基（西元町2丁目）は緑釉唾壺の出土から10世紀に改葬されたものと考えられている。

また、崖線縁辺部において骨蔵器6点が発見されている。内5点が国分寺寺地外北東地域（野川による開析谷沿い）、1点が西方多摩蘭坂遺跡出土のもので8・9世紀代の年代が与えられる。

一方、武蔵国分寺の瓦窯は、国内西方の丘陵地に営まれた。武蔵国分寺より遠いほうから、末野窯跡群（埼玉県大里郡寄居町、武蔵国分寺跡からおよそ60㎞、第2図6）、南比企窯跡群（埼玉県比企郡鳩山町、同じく40㎞、第2図7）、東金子窯跡群（埼玉県入間市、同じく20㎞、第2図8）、南多摩窯跡群（東京都稲城市、八王子市、町田市、同じく5～10㎞、第11図9：谷野窯跡、10：御殿山地区窯跡群、11：大丸窯跡）の4地域が知られている。

さて、中世、鎌倉街道上道はほぼ古代東山道武蔵路を踏襲したとみられるが、国分寺市域では西に150mほどずれ、尼寺伽藍を貫いて、北方台上に切り通しを残している。鎌倉街道に沿って中世の遺構、遺物が発見されている。武蔵国分寺跡、伝祥応寺跡、塚跡、恋ヶ窪廃寺跡、恋ヶ窪遺跡などである。

武蔵国分寺跡の各地点からは地下式横穴、道路跡、溝跡、土坑などの遺構や陶磁器、板碑、石臼、古銭などが出土している。その年代は大略14世紀後半～15世紀中葉に集中しており、鎌倉時代のものは僅かである。この内、

尼寺付近では、尼寺寺域北辺部の瓦溜群や寺域西辺部の地下式横穴３基、溝跡１条、土坑１基、寺域南辺部の推定鎌倉街道跡など比較的集中している。

伝祥応寺跡は北方切り通しの西側台地上にあり、昭和44年に小規模な試掘調査が行われた。平安時代以前と思われる遺構は確認されず、遺瓦も少なく、板碑が数点出土した。確認された礎石はいづれも中型で、しかも３個しか見つからないため建物の復元は出来なかった。また、鎌倉街道に面して、旧建物の三方を囲んでいたという土塁状のものは、堅固に積み上げたものではなく、僅かに平安時代の瓦や土器片を含んでいた。本遺跡の性格・内容についてはなお不明であるが、出土した板碑などから鎌倉時代末から戦国時代にかけて一堂形式の寺院が営まれたものと考えられ、近年明らかになった本多良雄家文書によれば、江戸時代享保年間、国分寺村に大破して廃寺となっていた深川海福寺末寺の黒金山祥応寺を本田新田に引寺したものであることが知られ、本遺跡が祥応寺と呼ばれる禅宗の小寺院であったことが推察される。

切り通しの対岸に塚跡がある。『東京府史跡勝地調査報告書』において、方形封土と古瓦の出土から、「国分寺に関係を有する一種の土塔」とされて以来、土塔と呼ばれてきた。昭和44年の調査で、洪武通宝１枚と瀬戸灰釉瓶子が出土し、塚基底部から縄文時代の埋甕４基と平安時代の竪穴住居２軒が検出され、室町時代の造営で伝祥応寺との関係で理解される遺構と位置付けされるに至った。

恋ヶ窪廃寺跡は、尼寺の北方約900m、ＪＲ中央線西国分寺駅の南側に位置する。数次に及ぶ調査の結果、古代～中世の礎石建物跡、掘立柱建物跡、塀跡、土坑墓、火葬墓など三期の変遷でとらえられる遺構群が発見されている。この内、二期（13世紀末ころ）においては、鎌倉街道に東面する伽藍を有する時宗系または禅宗系の寺院として再建されたものと想定されている。

鎌倉街道は恋ヶ窪廃寺の北約200mで谷をわたり、再び武蔵野段丘上を北上する。この恋ヶ窪谷は台地の奥で幅200～300 mと広がっており、谷壁斜面下からは随所の湧水が見られ、野川の源流の一つになっている。この付近一帯には「恋ヶ窪」という地名が残されており、国分寺と並んで古くより集落が開かれ、中世、鎌倉街道沿いの宿場として栄えたという伝承があるが、その実態は明らかになっていない。最近の台地上の縄文中期の集落跡（恋ヶ窪遺跡）の調査において、地下式横穴１基が発見されるとともに、付近より13世紀末の常滑系壺などが出土しており、僅かながらその実相究明に一資料を加えることとなった。（以上、市内中世遺跡に関しては、有吉重蔵1986「国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史　上巻』によった。）

2　調査のあゆみと現状

尼寺跡の地付近、字黒鐘（黒鉄）の一帯に伽藍跡があることは早くから知られていた。通称祥応寺跡とも金仏堂とも呼ばれた丘の上と通称鐘撞堂と呼ばれた丘の下の２か所に礎石や遺瓦が散布しており、しかも国分寺瓦と同様の瓦があることから、あるいは尼寺跡ではないかと江戸時代末の『新編武蔵風土記稿』にも記されていた。

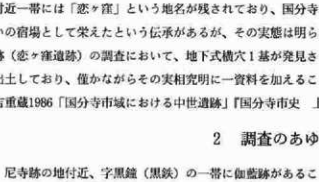


写真２　昭和39年３月　造成を免れた土塁北側を試掘、松の根元で版築土を確認

大正史跡指定時においては、国分寺関係の建築物群として「西院跡」と仮称された。（稲村坦元・後藤守一　1923年　『東京府史蹟勝地調査報告書』第１冊「武蔵国分寺址の調査」）

昭和31年度より33年度にかけて行われた、日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会（石田茂作委員長）による武蔵国分寺跡における初めての発掘調査は、もっぱら僧寺伽藍の究明を主眼としたため尼寺に関してはてつかずのままであった。

ところが、その後数年して東京周辺の市街地化が

および、ついに指定史跡地内の仮称「西院跡」の中心部分が業者によって宅地造成されるという事態が起き、国分寺市教育委員会による緊急調査が昭和39年3月から開始され、丘の下の雑木林の中に尼寺尼坊跡を発見し、ついでその南の鐘撞堂といわれる土壇上の高まり付近を試掘して、版築による掘込基壇をあらわし推定尼寺金堂跡と認定するに至った。その後、調査は僧寺跡まで対象が広げられて昭和44年まで継続され、僧寺跡においては中門、北方建物の規模や七重塔の再建などが明らかにされた。この国分寺市教育委員会による指定史跡地宅地造成工事を契機とする発掘は、調査団顧問に石田茂作、団長団に久保常晴、内藤正恒、滝口宏、調査主任に松井新一、宇野信四郎、玉口時雄、坂詰秀一、岩崎卓也、大川清、長島健、前沢輝政、寺村光晴、坂井利明の諸氏が参加して尼寺関係では次に列記する日程で行われた。(国分寺市教育委員会1987『武蔵国分寺跡調査報告－昭和三十九年～四十四年度－』

第一次　昭和39年3月17日～3月28日　(尼坊跡)

第二次　昭和39年4月29日～5月13日　(金堂跡)

第七次　昭和44年3月28日～4月8日、4月27日～5月8日（北方台上、武蔵野線拡張工事に伴う緊急調査）

さらにその後、昭和47年10月、国分寺遺跡地内に市立第四中学校の敷地が選ばれ建設が予定されたのを機に、曲折を経て広域学術調査を実施する常設の調査会が組織され、昭和60年度までの12年間でほぼ僧尼寺の寺域を確認することができた（第一期)。会長は星野亮勝市文化財保護審議会委員長（昭和54年3月までは塩谷信雄市長)、調査団長に滝口宏、副団長に永峯光一、大川清、坂詰秀一、調査員は都・市の職員が主体となった。

この内、尼寺関係の寺域確認調査をあげると、

45次	昭和52年7月4日～7月27日	寺域南限	82㎡
82次	昭和54年2月13日～3月8日	寺域西辺	67㎡
83次	昭和54年3月19日～11月12日	寺域西辺	826㎡
84次	昭和54年2月9日～12月14日	尼坊跡、塀跡ほか	1,217㎡
85次	昭和55年2月14日～3月13日	寺域北辺	16㎡
111次	昭和55年5月6日～11月7日	寺域北東隅	203㎡

昭和61年度からは、恋ヶ窪遺跡遺跡調査会と統合して新たに発足した国分寺市遺跡調査会により第二期調査として整備に先行する調査及び寺域確認補足調査が行われ、現在に至っている。

尼寺関係の寺域確認補足調査として次の調査が行われている。

346次	平成2年7月2日～11月22日	寺域南方地域	329㎡

この他、個人住宅建設などの緊急調査の成果を加えて、尼寺関係の調査については、『武蔵国分寺跡発掘調査概報XIV－昭和52～57年度尼寺寺域確認調査－』(1989年3月刊行、以下『概報XIV』とする。)にて報告した。

さて、尼寺において初めての発掘が行われた昭和39年当時、僧寺の金堂前の道を西に向かい、車の往来する府中街道を横切り、下河原線の土手を踏切で越えると、左手南側に推定金堂基壇の高まりが見え、右手北側にはくぬぎ林があった。その林において初めてトレンチが入れられ、尼坊が発見されたのである。今は、その単線が複線化され、東京外環状線たる武蔵野線に編入され、高架の壁が（台地上では掘り割り）丁界となって西元町四丁目を囲い込んでいる格好となる。周囲は府中市域となっている。

史跡指定地の範囲は北を市境、東を武蔵野線、西を金堂・尼坊の西を通る道路、南を中門を横断する僧寺へ向かう道路によりそれぞれ画されている。南側から西側にかけては住宅地となっている。南方に畑地が残っている。尼坊の北側は黒鐘谷戸と呼ばれる低地であるが、現在は西側の黒鐘公園まで埋め立てられている。

尼寺中枢部区画施設（掘立柱塀と溝）の北東部は武蔵野線下、寺域北東部は府中街道までの間に及ぶ。府中街道沿いは自動車販売店や飲食店が建ち並び畑地など空白地は僅かである。

3 層　　序

付近の本来の基本層序は、上から順に、Ⅰ層：暗褐色土（表土、耕作土、約30cm）、Ⅱ層：黒褐色土（奈良・平安時代遺物包含層、約20cm）、Ⅲ層：暗茶褐色土（縄文時代遺物包含層、約60cm）、Ⅳ層：黄褐色土（ソフトローム、約40cm）、Ⅴ層：黄褐色土（ハードローム）と続く。立川礫層までローム層厚は、約４ｍほどと推測される。

ところが、本地区においてはⅢ層～Ⅳ層まで削平が及ぶ部分があり、その上に造成時の整地土が載るなど、大きく土地が改変されている。

Ⅰ層は、Ⅰａ層：造成土①（砂、ローム、ガラ）、Ⅰｂ層：造成土②（ローム混じり暗褐色土）、Ⅰｃ層：耕作土①（暗褐色土）、Ⅰｄ層：耕作土②（黒褐色土）に区分される。Ⅰｄ層は推定金堂跡の前面と東面の一定範囲に限定される。

Ⅱ層は欠き、全くみられない。本層は遺構内堆積土の主要部分を構成することから、当時の地表面を形成していたものと考えられる。スコリアを多く含み、膠間があって粘性に欠く黒色味が強いなどの特徴から、多摩ニュータウン地域で基本層序となっているⅡB層：新期富士降下火砕層に対比される可能性が高い。ⅡB層は延暦19年(800)と貞観6年(864)におきた富士山の大規模な噴火産物と考えられている。しかしながら、武蔵国分寺跡においては、Ⅱ層とおもわれる黒褐色土が創建期の遺構（例えば尼寺推定金堂跡基壇築成土）内にも見られるので、Ⅱ層と遺構のありかたについては注意を要するのである。

ロームなど明瞭な埋土による遺構の場合にはⅡ層上面からの掘り込みが把えられた事例は幾つかあるが、Ⅱ層堆積以前、即ちⅢ層上面からの掘り込みで確実にⅡ層に覆われる遺構は今のところ無い。大半の遺構の堆積土がⅡ層と酷似しているので、遺構上部にある黒褐色土がⅡ層であるのか、遺構内堆積土なのか判断のつかない方が多い。

Ⅲ層は、上・中・下の３層に細分出来る。それぞれⅢａ、Ⅲｂ、Ⅲｃとしている。Ⅲａ層は黒色味あり、やや、Ⅱ層に似て、スコリアを多く含み、膠間があって粘性に欠く特徴を有する。縄文時代中期～後期にかかる遺物、遺構の検出面である。歴史時代遺構もこの層を下げ、Ⅲｂ層上面にて検出が容易となる。Ⅲｂ層上部は縄文時代中期の遺物包含層、Ⅲｂ層下部からⅢｃ層にかけては縄文時代早期～前期の遺物包含層。Ⅲｃ層はいわゆるローム漸移層で、縄文時代中期の大半の遺構はこの上面で検出が容易となる。縄文時代早期～前期の遺構の検出はⅣ層（ソフトローム）まで下げなければ容易にならない。

Ⅲ　調査の経過

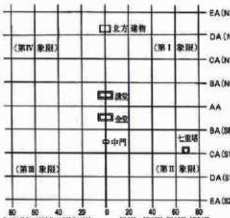
1　調査方法

調査基準線と発掘区の呼称

僧尼寺の広大な範囲を統一して調査するため、1974年以来、僧寺の中軸線を基準に、金堂心の北26.276mの中軸線上の点（コンクリート杭埋設）を座標原点とする極地座標系によっている（1979『武蔵国分寺遺跡調査会年報1974　武蔵国分寺跡』）原点は国家三角点及び市設基準点をもとに国家座標（国土調査法に定める平面直角座標系）に変換したところ、Ⅸ系（原点は北緯36°、東経139°50′）のX＝-34,446.019、Y＝-32,449.095、H＝64.989の数値を示す。極地座標北方向角は353°37′47″、原点における真北方向角は0°12′33″を示す。ゆえに、極地座標北（僧寺中軸線）の真北からのふれは西偏6°34′46″、磁北からのふれは、磁針方位が「西偏約6°30′（昭和45年）」なので、西偏0°4′46″である。

尼寺寺域は僧寺の西南すなわち極地座標系第Ⅲ象限にある。おおよそ、S（X＝－）150～300、W（Y＝－）300～450の範囲となる。

最小の発掘区は3×3mとし、その南と西に接する基準線に与えた記号の組み合わせにより呼称する。東西基準線はアルファベット2文字であらわす。1文字目は原点をAとして始め60m毎に以下B・C・D…とふり、2文字目はその60m内を3mごとに20区に分けA～Tまでふる。従い、原点を通る東西基準線はAA、以下南北共3mおきにAB・AC……AT・BA・BB・BC……BT・CA……と繰り返す。南北基準線は数字であらわす。原点を0とし、以下東西共3mおきに1・2・3……とふる。このようにして発掘区を呼称すると、中軸線AAと0に接する区を除き、4つの象限に同一名称があることになるので、調査地区の記号に象限を入れ、MK（武蔵国分寺跡の略）Ⅲ（調査地区の所在する象限）－373（調査次数）のように呼び、遺物への注記や写真・図面の整理を行う。本報告では中軸線からの数値をN・S・W・Eであらわし、併用する。



第3図　調査基準線の設定

調査区の設定

今年度調査の目的に従い、中軸線上の南北に配置が予定される講堂、金堂、中門（及び中枢部南面区画塀）、南大門（及び古寺域区画溝）の4つの建物の確認をすべく計画を立案した。尼寺の伽藍配置を推考するにあたり得られている事柄は、まず第一に金堂と尼坊間の心心距離約58mが僧寺金堂と講堂の心心距離57mに近いこと、寺域区画が二重に確認されているが、新旧関係でとらえられ、古段階にあたる内側のSD44溝から金堂心までの距離が金堂・尼坊間の数値に近いこと、第三に僧寺においては金・講堂の心心距離と同距離南に中門、2倍南に南大門（未確定）が位置することなどである。そこで心心距離の1／2にあたる29mを1単位とすると、金堂心の南2単位目に寺域区画溝（北側に南大門）、南1単位目に中門（及び中枢部南面区画塀）、北1単位目に講堂心、北2単位目に尼坊心、北2 1／2単位目に尼坊北方の一本柱塀跡（中枢部区画北辺塀と考えられる）が、それぞれあたり、僧寺同様の基準にもとづく伽藍配置をとるものと推考されるのである。各建物の調査は推定伽藍配置をもとに次のように計画した。

①講堂跡　金堂と尼坊間に存するものと考えられる。基壇の位置、平面規模、標高、構造の確認のため全面調査（北西隅部分を除く）を計画した。推定地付近はかつて窪みになっていたとのことで、昭和39年調査の折りは、トレンチにより地表から１m以上埋め立てられた状態が観察され、早くに削平を受けたために、講堂跡は欠失しているものと考えられていた。しかしながら、その削平の原因、規模が明らかでなく、いづれかに遺跡が残存している可能性を残すので、とりあえず、堆積状況把握のトレンチを十文字に入れ、その結果をみて、拡張することとした。

②金堂跡　基壇の位置、平面規模、標高、構造の確認のため全面調査を計画した。

昭和39年調査で基壇北東と南東両隅と推定西端線を確認し、「東西80尺、南北60尺」と推定されているが、その位置については新たに設定した調査基準線上のデータが無く、現地にてプロット出来ない。従い、今回は、報告記載の昭和39年調査トレンチを手掛かりにして、まず、基壇の位置を確定してから、基壇上を調査して柱位置の検出に努めることとした。すなわち、掘込み地業西縁、北縁、北東隅、東縁、南東隅と順にあらわし、以後未調査の西側南縁、南西隅、南側西縁と進めることとした。

③中門及び中枢部南面区画塀

過去未調査である。僧寺と同様に礎石据え方（坪掘り地業）が残存しているものと考えられる。全面調査を予定。中枢部南面区画塀は、北辺では僧寺と同じく８尺等間で検出されている。調査区内で中門の西側の部分を出来るだけあらわす計画を立てた。

④南大門及び古寺域区画溝

中門同様、過去未調査である。門跡南端が市道にかかる可能性がある。溝は上面幅1.4m、深さ0.7mと小規模ながら、中軸線方向に合致している。

さて、調査は、まず金堂跡の位置を確定して、中軸線及び尼坊・金堂心心距離を明らかにした上で、当初計画に修正を加えてそれぞれの地区において調査区を設定することとした。

2　調査日誌抄

3月30日　国分寺市遺跡調査会役員会にて4年度尼寺跡調査事業受託案承認

5月 1日　国分寺市と国分寺市遺跡調査会において調査委託契約締結

5月22日　地元黒鐘自治会（会長金子貞夫氏）に協力依頼。史跡地内と周辺居住者宅を訪問し協力依頼。調査区周辺に広報板設置。周辺道路を通学路とする国分寺市立第4小と府中市立武蔵台小を訪問し各校長に協力依頼。市広報に発掘のお知らせと協力依頼文原稿を入稿（6月15日号掲載）

5月29日　不要防犯灯の撤去につき給電停止を依頼。旧家屋に供給していたＮＴＴ線の撤去につき依頼。

6月 1日　調査対象地区に安全柵設置

6月 3日　ハウス・トイレ搬入（リース）、樹木移植開始

6月 4日　発掘器材搬入、基準点測量（委託）

6月 7日　梅雨入り

6月11日　午後、推定金堂跡北側に設定した東西トレンチより発掘開始。

写真3　発掘着手時状況（金堂地区）

6月16日　旧トレンチ現われ、版築を確認。

6月26日　掘込み地業の北東隅を確認。北西隅は北への落ち込みにより残存していない模様。

7月 1日　基壇東辺部調査開始。

7月 8日　掘込み地業の南東隅を確認。

7月10日　残存基壇上の調査に着手。表土は薄いが、部分的に建物の基礎や設備の埋設物などにより攪乱されている。

7月16日　法政大学大学院生内藤亮氏発掘に参加（9月16日まで）

7月20日　梅雨明け

7月28日　このころ猛暑（最高気温35℃）続く。

8月 6日　掘込み地業の西端・北端を確認。金堂掘込み地業範囲は、東西26.7m（90天平尺）、南北18.5m（62.5天平尺）と確定。尼坊心と金堂心間は58m（196天平尺）、方向角は4°弱で尼坊の角度（約7°弱）に対して振れる。

8月11日　中門推定地から南門推定地の調査に着手。中軸線に沿って、幅3mで金堂掘込み地業南縁から調査区南端の公道北側までトレンチを設定。金堂側（北側）から掘り始める。

8月13.14日　調査会夏休み

8月20.25日　市教委主催「夏休み発掘体験教室」実施。

8月27日　トレンチ南端の道路際の南門推定地にて版築による掘込み地業を検出。金堂心より約45mを測る。また、推定中門地区の北側、金堂心より20～25m付近にて柱穴を数個検出。建築遺構となりうるか拡張して追及し始める。

9月 2日　南門推定地検出の掘込み地業の北西隅を確認。

9月 3日　残暑厳しく、今夏最高気温（36℃）

9月 8日　本日、調査研究指導委員会。推定中門地区の北側の柱穴数個は、中軸線を挟んで東西に並ぶ柱列SA16（4個、後SX95～98と訂正）とSA17（この時点では2個、後3個に増え、SX99～101と訂正）となり、東西方向にトレンチを延ばすも、繋りは無く、門跡にはならないことがほぼ確定。

9月24日　トレンチ南端の道路上にて、掘込み地業の東辺を確認。東西幅約12mと判明。

9月29日　掘込み地業の西辺部をあらわす。礎石掘付痕跡は確認できない。中央西側に中軸線に

直交して、SA18一本柱塀跡3間分を検出。柱間は2.4m。2時期ある。尼坊北側のSA4一本柱塀跡と似るほか、僧寺中枢部区画の塀跡にも似ている。従い、推定中門地区での状況と合わせて、この掘込み地業は中門と推定され（SB142）、SA18は尼寺中枢部を区画する施設の一部と推定されるに至った。（10月8日にSA18の南側、SD44溝跡との間に土坑の連続するような形態のSD264溝跡が検出され、さらにこの考えを強めることとなった。

10月 9日　講堂推定地に南北十文字にトレンチを設定し、掘削開始するも、一面にロームの盛土で一部（北端）深掘りしたところ、盛土厚は1mを測るので、人力による発掘続行を断念。

10月23.24日　遺跡見学会　2日間で271名参加。

写真4　遺跡見学会（中門地区）

10月27日　推定中門西側、SA18塀の北側にて検出されたSK1342瓦溜めの西延長地点（調査区西端）にて、SD264溝と似て土坑の連続するような形態のSD266溝を検出。同一溝になる可能性高い。

11月10日　中門北側のSK1357土坑を半裁したところ、柱穴と考えられるに至り、SX102と変更。柱穴下部から、礎盤に用いた完形の字瓦4枚が出土。

11月18日　文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官田中哲雄氏、同文部技官増淵徹氏、東京都教育委員会文化課大谷猛氏現地視察。本日空撮。以降、平面図・断面図作成続行。

写真5　文化庁調査官視察

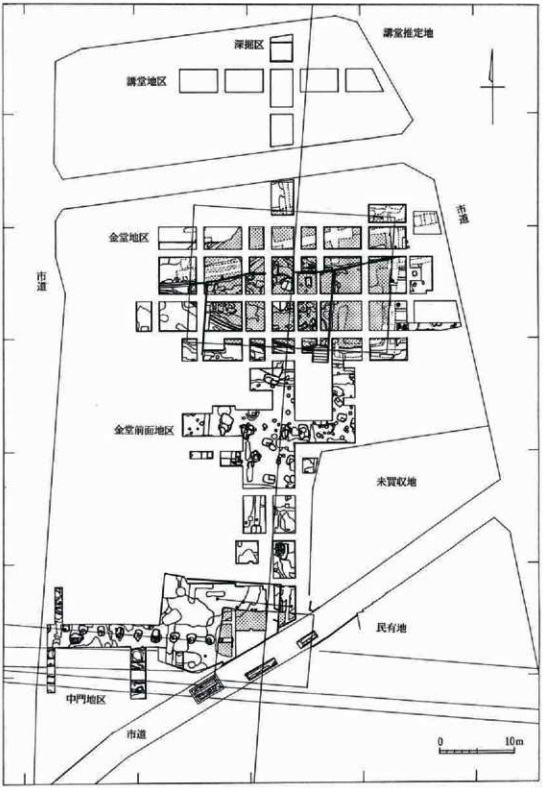
12月 9日　金堂基壇の断ち割りと剥離標本作成。推定中門基壇下（SA18延長）より柱穴と思われる落ち込みを検出。

12月15日　金堂南東部発見の巨石（礎石）2個を取り上げる。遺構内への砂埋め戻し昨日より着手。

講堂推定地トレンチ再北端における深掘り終了。盛土と表土の下は、黒褐色土、ソフトローム、ハードロームと続くが、その全体が各々形成時に水の影響を受け、砂質化、粘質化が進み鉄分が多く見られる。

12月23日　機械による発生土埋め戻し開始。

12月26日　埋め戻し、原状復旧を終え、発掘調査完了。



第4図　4年度調査区遺構配置図

Ⅳ　調査の概要

平成４年度の調査は総面積956㎡を実施した。当初の目的の内、金堂と中門（及び中枢部南面区画塀）については、不十分ながら確認することができた上、金堂前面においては柱穴群を検出し枢要部の様相把握に重要な資料を加えることができた。

しかし、講堂については、推定地一帯に造成土が厚く堆積していることから、深掘試掘坑１か所のみにとどめ、５年度調査に譲ることとなった。また、南大門については、調査区外（史跡指定地外）に求められることになった。

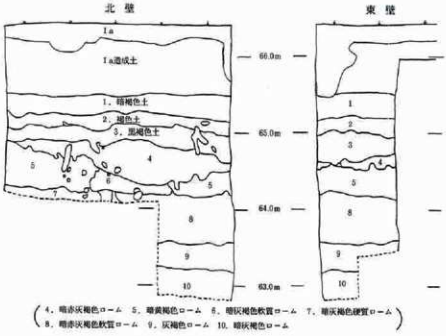
中軸線の北より、講堂地区（調査面積10㎡、別に調査中断トレンチ85㎡）、金堂地区（同475㎡）、金堂前面地区（同241㎡）、中門地区（同230㎡、道路上の試掘７㎡を含む）の４地区に分け、以下に概要をまとめることとしたい。

１　講堂地区

昭和22年9月の空中写真をみると、現推定金堂跡基壇から講堂推定地と尼坊跡にかけて雑木林になっている。『武蔵国分寺の研究』（石村喜英著、本文は昭和30年を内容現在とする）によれば「土壇址北面の雑木林は著しく低く小盆地を形成し…」と、また『武蔵国分尼寺』には、「この土壇の北側は、かつて窪みとなっており、土が早く採られてしまった状態であった。」とある。講堂推定地一帯は、少なくとも昭和22～30年ころまで、雑木林となっていて、周囲よりかなり低くなっていたことが分かる。「昭和38年後半、すでに史跡に指定されている西院址（尼寺址）の主要部分が業者の手により整地の上住宅化され…」（『武蔵国分尼寺』）る時におそらく雑木林が刈り払われ、整地造成工事が行われたものと思われる。なお、この時、土壇（現推定金堂跡基壇）の南半がかろうじておおがかりな削平をまぬがれたほか、雑木林は尼坊付近のみ残った。

昭和60年度に実施した公共下水道西元町地区６号工事の試掘調査が講堂推定地中央の東西道路と東側南北道路で行われた。講堂推定地付近では地表下70～120cmで硬化面が広がっており、その中に東西17m×南北10m以上に及ぶ落ち込みを検出したが、講堂跡との関連は不明である。

さて、講堂推定地北半には２軒の家屋が現存しているので、本年度の調査区は、この家屋と金堂基壇との間の一角に尼寺中軸線に合わせて（調査区の方向は僧寺中軸線）十文字にトレン



第５図　講堂地区　深掘区断面図

チを設定した。この付近において昭和39年に試掘が行われ、1m強の埋め戻し土が見られたわけであるが、今回もトレンチ全域で20～50cm掘っても埋め戻しのロームのみであった。そこで、窪地の範囲が広く及んでいることが判明し、人力による表土除却は困難であり、又今年度の調査続行も出来ないことが確定したので、堆積状態の把握のための調査に限定することとし、南北トレンチの最北端で深掘を行った。

第5図はその断面図であるが、現地表下0.9mまでローム とコンクリート片混じりの造成土、同じく1.5mまでは暗褐色～黒褐色土で、以下はローム層となる。表土層（耕作土）は無い。暗褐色～黒褐色土はローム粒を多く含み、瓦片若干をまじえるが、通常の歴史時代遺構内堆積土とは異なる。ロームは硬質ロームが軟質化していたり、灰褐色（白色味の強い部分あり）を呈していたり、酸化して赤味が強くなっている部分などが、ローム上部から下部（現地表下3.6m、ボーリングによると同じく4.5mまで）まで全体に観察される。西から東へ向かってその傾向が増す。ローム層はレベル的にV層ハードローム以下に相当するはずであるが、その硬さはやや弱く、黒色帯なども欠いており、対比は困難である。以上から、ローム層形成時より水つきの状態であったと考えられる。黒褐色～褐色土の生成時期、原因は不明であるが、程度はローム層のそれより弱いが水の影響を受けている（松田隆夫氏教示）。推定金堂掘込み地業を切る大規模な落ち込み（SX107）が推定金堂の北側に広がっているが、その堆積土にも似ており、且つ両者の底面レベルも近いので、関連があるかもしれない。

とにかく、この状態では講堂の検出は容易でないことが想定され、あるいは、講堂築造時に整地がなされていることも十分考えられるので、5年度の調査にあたっては注意を要する。

2　金堂地区

本地区における目的は、推定金堂跡基壇の位置、平面規模、標高の再確認と南西部残存基壇部分（昭和39年調査時住宅下）で基壇構造と柱位置の確認を行うことであった。

金堂地区で確認した遺構は、SB140推定金堂跡のほか土坑4基、SX107不明落ち込み、小穴20などである。

SB140　推定金堂跡

東西26.7m、南北18.5mの規模の掘込み地業を伴う基壇を確認したが、上面は削平され、礎石の配置など建物構造は把握出来なかった。また、基壇周囲も大きく造成され、基壇外装の痕跡は遺存していなかった。

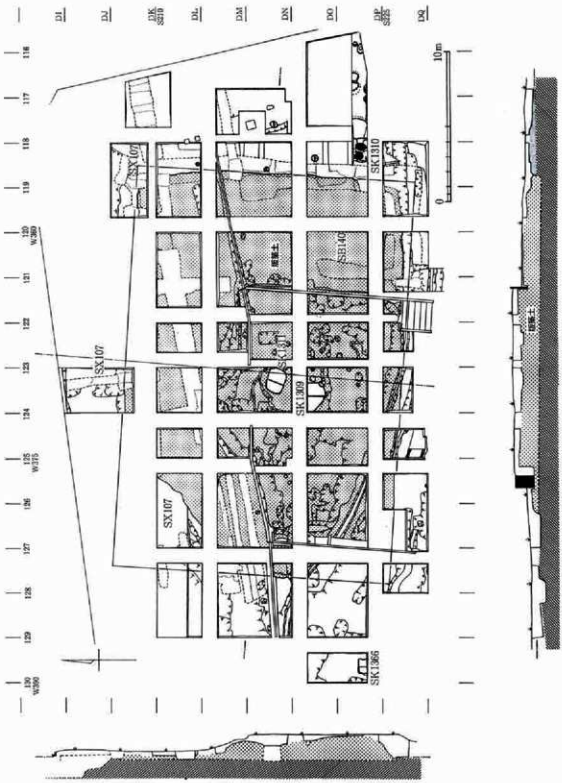
推定金堂基壇とその周囲は、調査の結果、相当の破壊を受けており、極めて遺存状態の悪いことが再確認された。

破壊の大半は昭和30年代後半の宅地造成によるものであるが、それ以前の畑地化にも大きく起因する。

大正9年の史跡指定に先立つ現地踏査当時、鐘撞堂跡と通称された雑木林の中に土壇と1個の礎石があり、土地の古老の話では明治初年にはなお3、4個の礎石が付近にあったが、後多摩川砂利鉄道（正式には東京砂利鉄道といい明治43年6月に開設、国分寺市市史編さん室より教示）敷設の時、畑にするために他へ移転したということである。（大正12年『東京府報告書』）

尼寺跡付近の耕作による地山の削平は2段になっていて、合わせて0.6mの厚さがある。下層はⅢ層下部（Ⅲc）からⅣ層ソフトロームに及ぶⅠd層（耕作土②）で、やや黒色味を帯びており、推定金堂跡の前面と東面の一定範囲において認められる。前面においては推定金堂とほぼ平行して東西に長く広がる。南北は掘込み地業の南縁5m付近より南へ約15m、東西は調査区内では終わらず幅25m以上の範囲である。東面においては、掘込み地業の東縁1.5mより始まり東西には9m以上続くことが確認されたが、南北は不明である。地山の削平の始まりは緩やかな傾斜面になっている。

上層のⅠc層（耕作土①）はおおむねⅡ層黒褐色土からⅢ層暗茶褐色土に及んでおり、現在の武蔵国分寺跡周辺で地表を覆う耕作土と変わりなく、昭和30年代の造成以前の表土である。基壇の南側は切り崩され、その屈曲した地目の境に1条の掘り割りの畦畔（『武蔵国分寺の研究』による、根切り溝の役目も果たしたと考えられる）



第6図　金堂地区全体図

が通っていた。

昭和22年の前掲空中写真では、大正指定当時と変わることなく、雑木林となっている。『武蔵国分寺の研究』掲載の写真では既に多くの雑木は刈り払われ、松の木1本が土壇上にある。おそらくこの松が、敷地境にあったためか造成による伐採を免れ、昭和39年調査時に尼寺金堂の目標となったものと同一と思われる。

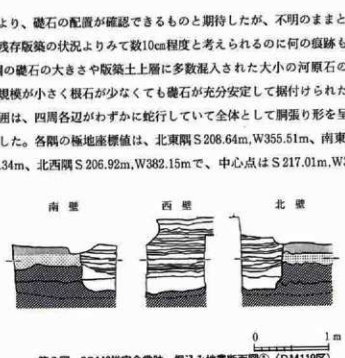
造成工事は土壇の立地を生かすようにほぼ1宅地とすべく切り割りされ、コンクリート擁壁が南側を除く三方に作られた。北側は松の木の根元近くまで土壇が削られた。西側にかけてもほぼ同じレベルで造成された。おそらく120cmほどは削られた模様で、かろうじて築成土下半部が残存しているにすぎない。東側は70cmの削平にとどめられ、築成土中半部以下を残すことになったのである。南側はゆるやかなスロープとなるよう盛土されていた。

現在は切り株を残すのみのこの松の根元には旧表土が残されていた。根元のレベルに比べ土壇上の地表面（旧家屋の敷地面）は10数cm下がっている。その地表下のガラ混じり整地土（最も影響の少ない旧家屋の下で5～10cm、旧家屋北側水周りでは40cmほど）を除去すると（北半においては版築土崩壊土を経て）基壇築成土上半部があらわれる。即ち旧家屋の下にあたる基壇南側中央から西部にかけての東西12m、南北4mほどの範囲が最も良く基壇が遺存していた。

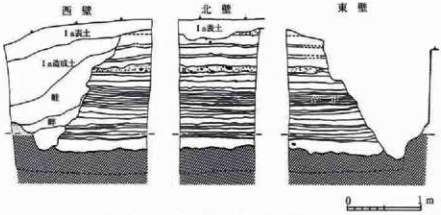
この旧家屋撤去後の土壇上の調査により、礎石の配置が確認できるものと期待したが、不明のままとなった。基壇築成土上部の削平規模は小さく、残存版築の状況よりみて数10cm程度と考えられるのに何の痕跡も残していないのは、ＤＰ119区より出土した2個の礎石の大きさや版築土上層に多数混入された大小の河原石の存在と版築土の硬度からみて、礎石掘付掘方の規模が小さく根石が少なくても礎石が充分安定して据付けられたことによるものと推測される。掘込み地業の範囲は、四周各辺がわずかに蛇行していて全体として胴張り形を呈しているのでその最大値をとって長方形に復元した。各隅の極地座標値は、北東隅Ｓ206.64m,W355.51m、南東隅Ｓ227.1m,W356.7m、南西隅Ｓ225.38m,W383.34m、北西隅Ｓ206.92m,W382.15mで、中心点はＳ217.01m,W369.42mである。

版築土は約1.6mが遺存していた。残存地山（Ⅲａ層）上面から残存版築上面までは、0.85mの高さ、基壇掘込み部底面までは、基壇東側で1m、西側で0.7mの深さである。

なお、基壇築成土の観察は、もっぱら旧トレンチ断ち割り断面などによろうとしたが、ＤＭ119区で高さ1m、ＤＱ119・120区で1.1mの遺存なので、新たにＤＱ123区において東西1m、南北1.2mの断割りトレンチを入れ、高さ1.6mの断面観察を行うこととした。また、ＤＭ119区とＤＱ123区にお



第7図　SB140推定金堂跡　掘込み地業断面図①（DM119区）



第8図　SB140推定金堂跡　掘込み地業断面図②（DQ123区）

いては断ち割りトレンチ三方の土層断面剥離標本を採取した。

掘方の底面はV層ハードローム上面から上部に達している。底面の掘込み深度（標高値）は地形（地層）の傾斜に合わせて東側より西側が約30cm浅く、東側で標高65.6m、西側で65.9mほどである。掘方の立ち上がりはほぼ垂直である。底面はほぼ平坦であるが、粗掘りのままのため部分的に凹凸があり、これを均すように10～20cmほどの暗黄褐色土ロームで埋め、その上面を水平に堅く締める。これより上にほぼ水平な版築層が重なる。掘込み部最下層を含め土層断面全体に及ぶ明瞭な分層界を基準にとらえられた30層が看取出来る。各層厚は1～15cmほどである。硬度は、各層の上下全体ごとに異なっており、各層の上部のみ堅くなっているわけでは無い。従い、分層した各層が版築の1単位になるものと思われる。同一層中の部分に何枚か薄く層状に見える部分があるが、これらは版築土敷き込みの工程を示すものと考えた方が適当である。しかし敷き込みが広範囲に及ばない部分的な版築作業の結果の可能性をも否定できない。

版築土30層は全体に大きく3つの部分に分けられる。下半部は第1～7層までのロームを主とし、最下層をベースに極めて堅く築く。上部に礫混りのやや白色化したロームがみられる。上下35cmほどである。中半部は第8～19層までの黒色土を主とするもので、薄い層が連続する。硬度はやや弱い層が多い。上下45cmほどである。上半部は第20～30層までの明るいロームを主とするもので、1～10cm前後の礫を多く含む層（第24・30層）を挟む。礫はこの2層を中心として全体に混入される。大半が径1～5cm大の小礫であるが、10～20cm大の礫も1㎡あたり1～3個ほどは散見される。上下80cmほどで、版築土1枚の厚みが5～15cmと粗くなる。

版築土の硬度は、自然層のV層（ハードローム）より全体に強い。最も堅いのは下半部の第6層と上半部の第22層である。逆に最も軟らかいのは最下層の下部である。山中式硬度計の直読値は、地山のV層（ハードローム）が23～27であるのに対して、版築土下半部は23～31、中半部は25～30、上半部は24～31となっている。

版築土確認最高地点はDO124～126区付近で、標高 67.45mであった。残存地山（Ⅲa層）の最高点は基壇東側のDM～DQ119区周辺の標高66.6mである。

基壇の規模は、化粧石、雨落石敷、階段、足場穴などの痕跡が遺存していないため、確定できなかった。

造成以前の昭和30年ころ、土壇の規模は東西90尺（27m）、南北52尺（15.6m）を残しており、しかも東辺はほぼ直線で、少なくとも東半分は旧態を良く残しているかのようである（石村1960『武蔵国分寺の研究』）。また、その東西規模は掘込み部の東西規模26.7mに近い。さらに、基壇の東辺は、DP119区の礎石の出土状況からみても、掘込みラインに近いものと考えられる。以上のことから、旧地表面上における基壇の規模は、今回確認した掘込み地業の規模に近いものと推測することができる。即ち、東西26.7m（90尺、1天平尺＝0.296mとする、以下同じ）、南北18.5m（62.5尺）となる。基壇の出を10尺程度とすると、桁行70尺、梁行42.5尺の建物が想定される。

なお、今回確認出来たのは、掘込み地業を伴う基壇の時期のみで、版築土内からは人工遺物は1点も出土せず、また他の先行遺構も無いため、設置時期に関わる資料は得られなかった。

SK1309.1310.1311土坑

3基は、形態、堆積土など類似した遺構である。共に東西方向に長軸がある長円形土坑である。底面は平坦で広く、口すぼまりのため、断面がフラスコ形となる。各壁とも0.2mほどオーバーハングしている。

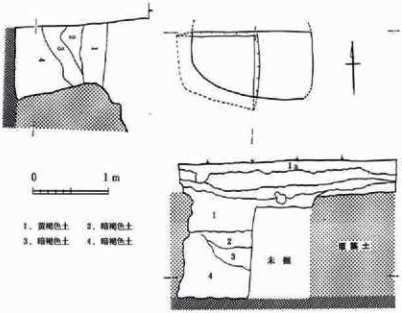
SK1309.1311土坑は推定金堂廃絶後に基壇を掘り下げている穴で、基壇中央付近に並んでいる。SK1309土坑は南側でDO124区、SK1311土坑は北側DN124区にある。共に版築土を掘り下げ、地山のV層ハードロームを底とする。SK1309土坑は上部が崩れ、ロート状に開いている。SK1311土坑の場合は上部が削平される。頸部までは締まりの無いロームブロック混じりの暗褐色土が堆積する。頸部より上には、版築土の崩壊土が載る。規模は、SK1309土坑の上面東西2m、南北1.2m以上、深さ1.3m、SK1311土坑の上面東西1.6m、南北1.3m、深さ1.1mである。上層の版築土崩壊土中より瓦片若干が出土しただけで、構築時期を示す資料は得られなかった。

残るSK1310土坑は掘込み地業外の南東隅、ＤＰ118区にある。検出面はⅣ層ソフトロームで、上部は礫石と瓦片を含む耕作土に覆われる。東西1.3m、南北0.9m以上、深さ1.1mの規模である。堆積土は同じく締まりの無いロームブロック混じりの暗褐色土である。出土遺物は無い。

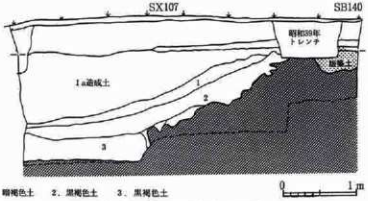
SX107 不明落ち込み

推定金堂の北に広がる。落ち込みの南縁を確認した。掘込み地業の北東部から北辺、そして北西部にかけて東西に広がる。北東部では僅かに掘込み地業を切り、北西部では大きく基壇内に入り込んでいる。南壁は緩やかな立ち上りで、幅２ｍ、深さ1.4mで底面に到達する。底面はほぼ平坦で、少なくとも1.5m以上北へ続く。南北幅は3.5m以上、東西幅は37.5m以上である。

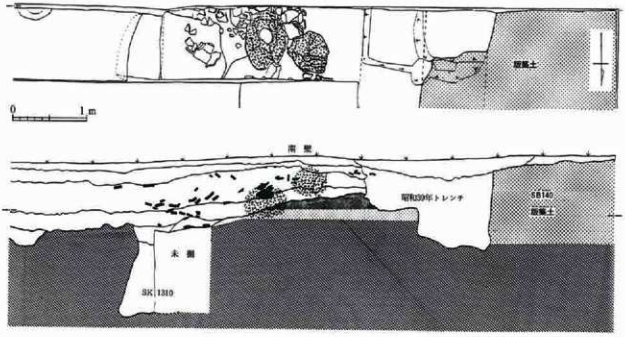
堆積土は黒褐色土を主とする。瓦片少量が出土。落ち込み上部は



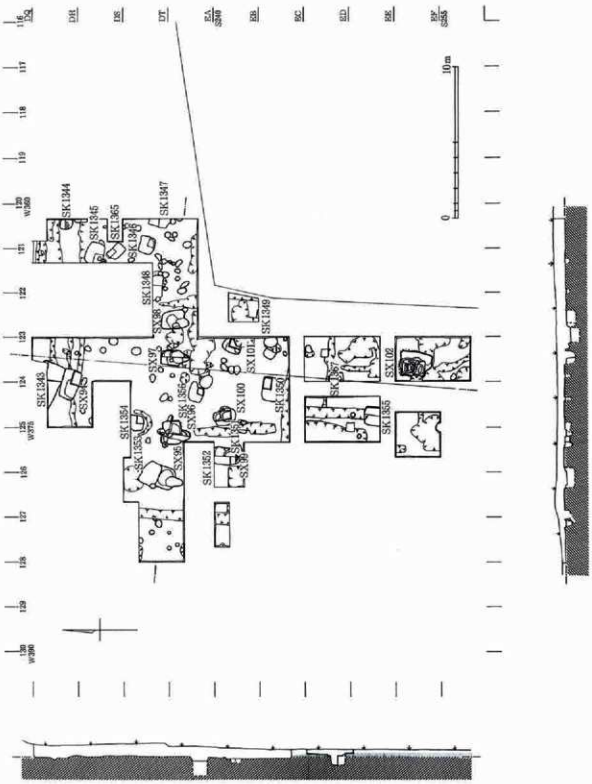
第９図　SK1309土坑断面図



第10図　SX107不明落込み断面図



第11図　ＤＰ118・119区礫石出土状況・断面図



第12図　金堂前面地区全体図

北側に向かって傾斜していて、調査区内において現地表面から最大1mは下がっている。現地表までは、造成時の埋戻土に覆われる。

掘込み地業北縁から北23m地点における講堂推定地の深掘りトレンチにおいても0.9mの造成土の下に黒褐色～褐色土が0.6 ～0.9mあり、その下のレベルとSX107底面のレベルが近く、堆積土も似ているので、関連があるかもしれない。前項で述べた講堂推定地が以前窪地になっていたことの原因の一つと考えられる。

ＤＰ118 ・119 区の礎石

推定金堂掘込み地業東縁に直交して同区に入れた幅1mのトレンチ内において、61点の瓦片と6点の礫を図化して採集した。

耕作のための地山削平の始まりが西から東への緩やかな傾斜面になっていて、その部分のＩc層（耕作土①）からＩd層（耕作土②）にかけて出土した。丁度、SK1310土坑の上にかかる位置である。

礫の内2点は、0.8×0.6×0.3m と0.65×0.45×0.45mの大きさで、共に自然面を有する巨石である。大きいほうは被熱のためか二つに割れており、周辺から同一と思われる礫片少量を一括で採集した。二つともチャートで僧寺金堂、講堂、塔などの礎石と同一石材である。他の4点は径20cm前後の砂岩系の円礫と破礫である。

西側基壇上から瓦片と共に昭和30年代の造成以前に開墾等のために落とし込んだ状況を示しており、推定金堂基壇上に据えられていた礎石と考えられる。

3．金堂前面地区

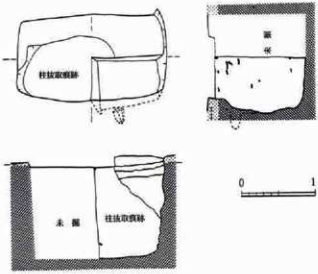
SB140推定金堂掘込み地業南縁から2m～29m南（SB142推定中門掘込み地業北縁から北へ5m）の範囲の発掘区で中軸線に沿って南北に入れたトレンチを基本に展開したものである。

南側は丁度、つっこみ道路として簡易舗装されていた範囲にあたり、転圧を受けており、20～30cm で確認面があらわれる。北側はⅣ層ソフトローム上部までＩd層（耕作土②）に起因して、ほぼ全面にわたって地山の削平を受け一段と低くなっている。

本地区において確認した遺構は、ＳＸ94～102掘立柱遺構の他、土坑17基、小穴70などである。

SX94掘立柱遺構

SB140推定金堂掘込み地業南縁から南へ4mで掘方北端、中軸線から西へ0.5mで掘方東端の位置にあり、北東部をＳＫ1343土坑に切られる。短軸方向をＮ16°Ｅとして振れが大きい。



第13図　SX94掘立柱遺構断面図

掘方は東西（長辺）2m、南北（短辺）1.2mの長方形で、深さ1.4mあり、底面はほぼ平坦。南壁は0.2mオーバーハングし、掘削の工具痕跡が明瞭に残る。柱抜取痕跡が西南部にあって、長円形の上面東西1.2m、南北0.8mほどであるが、東側では埋土の下まで斜めに伸びて東壁まで達している。底は掘方底面に一致する。埋土はロームで堅く締まっているが、斜めになった抜取痕との接触部分では顆粒状になり締まりが無くなっている。抜取りの際に西方へ斜めに倒した結果、根元が東側の埋土を抉ったものと考えられる。

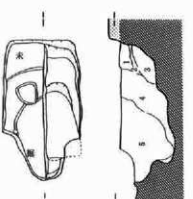
確認された柱抜取痕跡から、柱の根元径が0.4 ～ 0.5m前後はあったものと想定される。

南壁上部のオーバーハング最深部（底面から0.9m）に横穴状の小柱穴が検出された。入り口部分径0.13m、奥行き0.23mで、平面・断面共に砲弾型を呈する。その位置は掘方南東隅から0.6m西で、延長方向は柱抜取痕跡の東端部にかかる。掘方内において柱を支える構造材の痕跡である可能性があり、相当に高い柱か、重心位置の高い構造物を支えていたものと考えられる。周囲に関連の遺構は無いので、独立した１本の掘立柱である。

柱抜取痕跡内には瓦の小片がやや多く混入する。偏行唐草文字瓦（第21図４）と女瓦格子目叩き（第25図1）などが出土。

ＳＸ95～98掘立柱遺構

４本の柱穴が中軸線にほぼ直交して東西方向に並ぶ。SX95・96は中軸線の西、SX96とSX97が東で、SX96掘方の西が丁度中軸線に接する。SB140推定金堂跡掘込み地業南縁から南へ11.5m。柱穴の間隔は西からSX95とSX96が約3.2m、SX96とSX97が約5.1m、SX97とSX98が約2.4m。A・B２時期あり、B期柱抜取痕跡がいづれも南側へ張り出し、掘方の全体が柄鏡型となる。掘方は長方形で、SX95・96が東西に長くてやや規模が大きく、SX97・98が南北に長い。短辺1～1.2m、長辺1.2～1.5m。深さはA期が0.4～0.6m、B期が0.7～0.8mと掘方平面の規模の割に浅い。断割り調査したSX96・97のいづれにおいても、掘方北側壁の立ち上がりは緩やかであるのに対し、南側はオーバーハングしている。４本共B期が南に深く掘り直され、さらにB期柱が南へ抜き取られていることと考え合わせると、SX94同様、掘方内において柱を支える構造材が用いられていた可能性がある。



第14図　SX97掘立柱遺構断面図

掘方形態とその方向の僅かな相違から、西側のSX95とSX96、東側のSX97とSX98が各々２本一対であったものと考えられる。A期における埋土は共通して黒褐色土とロームであり、構築に僅かな差はあっても、存立の時間差は無いものと考えられ、２対が中軸線を挟んで東西対峙し、東西方向に揃うことによって成立していたものと思量される。A期においてわずかに方向を異にしていたものを、B期において修正したものであろう。

柱穴内よりは、土師器、須恵器、瓦、埼片がやや多く出土した。そのうち、接合資料が２点ある。SX96B期埋土内とSX97A期埋土内出土の埼（第27図３）と、SX96A期埋土内とSX97掘方内出土の須恵器坏（第20図１）である。これよりA、B各期の時間差は少ないものと推定される。

他にSX97から須恵器坏（第20図２）、SX96から偏行唐草文字瓦（第21図５）、女瓦（第25図３）が出土。

SX99～101 掘立柱遺構

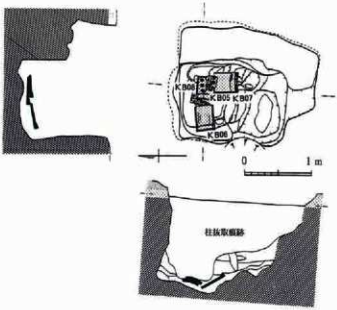
SX101は掘り直しと抜き取り穴がみられる柱穴だが、SX99と100には柱痕跡などなく、掘方形態と埋土からみて柱穴と判断した。３個の柱穴が中軸線に直交して東西に並ぶ。SX95～98掘立柱遺構の南3.4mでほぼ並行する。中軸線の西にSX99・100、東にSX101である。SX101の東側は攪乱されている。柱穴の間隔は西からSX99とSX100が約2.7m、SX100とSX101が約4.51mである。掘方の規模はSX95～98より小さく、いづれも南北に長い長方形で、長辺1.2m、短辺0.9m前後で、深さ0.6mほどである。南北方向の壁の立上がりは一方は緩やかで、その反対側がややオーバーハングしている点がSX95～98に共通する。SX101の東に柱穴を想定すれば、SX95～98同様に４本１対の柱穴が中軸線を挟んで東西に並ぶこととなる。SX99・100とSX101炉は、形態と方向をやや異にしている点もSX95～98に共通する。

SX100よりは、体部下端と底部外周に回転ヘラケズリ再調整を施す須恵器A坏底部小片と須恵器A坏口縁部小片が出土しているが、これよりSX95～98に先行する可能性を指摘できる。

SX102 掘立柱遺構

SX94同様の一本柱で、中軸線の東側1.2m、SB140推定金堂跡掘込み地業南縁から南へ26.6m、SB142推定中門掘込み地業北縁から北へ8.6mに位置する。

全体規模は東西1.9m、南北2.1mで、短辺1.1m、長辺1.6mの南北に長い掘方の東と南に幅0.6mの浅い張り出しが付く。最深部は確認面（Ⅲb層中ほど）から1.6m。長方形掘方の底は南から北にかけて階段状に下がり、北側部分中央に柱痕跡を残す。僅かに残った埋土内より礎盤にした宇瓦4枚が出土した。2枚は柱直下に水平に隙間無く重複して置かれ、第22図 1が上の為細かく割れていた（第22図2は下）。押さえとして、南（第23図2）と西（第23図 1）の直角に柱に向かって下り傾斜で置く。いづれも、凸面を上にし、瓦当面を外へ向けている（3枚は西、1枚は南）。柱径は根元で50cm前後ある。北壁の下半は15cmほどオーバーハングしている。



第15図　SX102掘立柱遺構断面図

土坑と小穴

本地区では、SK1343～1356・1365・1367・1368の17基の土坑と70個の小穴が確認された。

この内、SK1365・1367は長方形のプランと深さ、堆積土から柱穴の可能性を持つ。

また、SK1343・1348の堆積土は推定金堂基壇を切るSK1309・1311などと似ている。

小穴はSX94～101掘立柱遺構の周囲に多くある。幾つかは柱穴であり、SX95～98に並行してやや規則的な配置が看取されるが、確定出来ない。

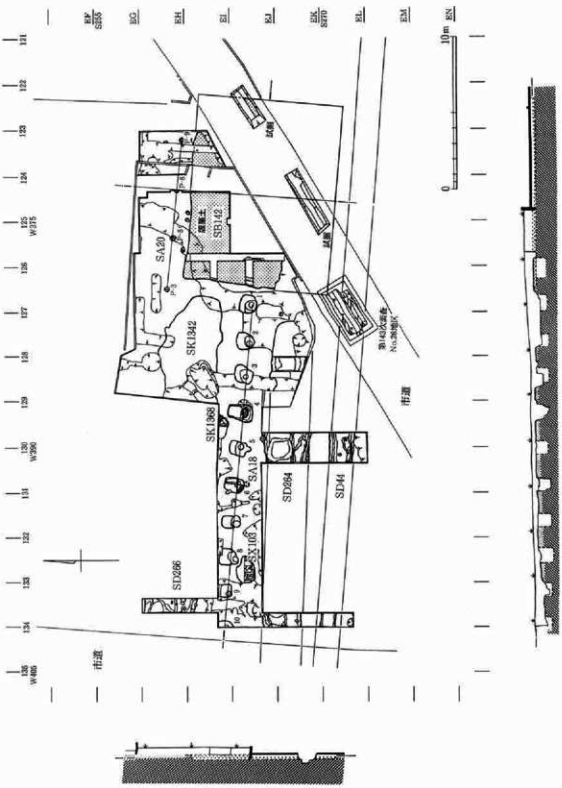
4．中門地区

SB140推定金堂掘込み地業の南へ中軸線に沿って南北に入れたトレンチの南端（その南側は舗装された市道）でSB142推定中門掘込み地業を確認し、拡張した調査区内でSA18掘立柱塀跡、SA20柱列跡、SD44・264・266溝跡、SK1342瓦溜、SX103掘立柱遺構、小穴（柱穴）7個を検出した。全面にわたり、土地分譲による造成とその以前の耕作でⅢb層からⅣ層近くまで削平を受けており、遺構の残りは良くない。また、南側市道に沿って、畑当時の根切り溝が深く遺構を攪乱している。

SB142 推定中門跡

東西12.5m、南北推定9.6mの規模の掘込み地業を確認した。南側市道上の2か所の試掘で東縁は僅かに残る地業土により確認し得た。南縁部分は遺存状況悪くつかみきれなかったので、南北推定はSA18塀の取付き位置を門棟通りと想定しての復元である。礎石の据付痕跡は全く削平され残されていない。

掘込みラインはSB140同様、直線でない。Ⅳ層ソフトローム下部からⅤ層ハードローム上部を底面とし、やや船底形の断面形を示す。底面は壁ぎわより中央部が10cmほど深い。地業土は20～30cmの遺存で、7枚の版築層がみられる。1枚の層厚は2～8cm。最下層は粗掘り後に敷き均した黄褐色土で、この上の黒褐色土が最も堅く締められている。この層には、白色粘土粒が若干含まれる。掘込み底面の標高は65.8mで、SB140推定金堂掘込み地



第16図　中門地区全体図

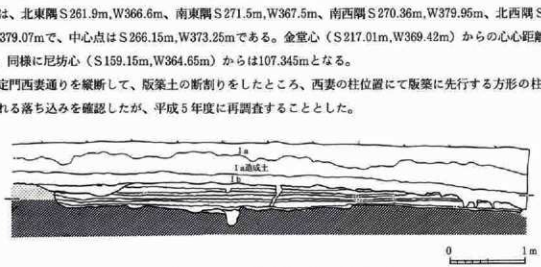
遺構番号	位置	平面形	上面幅		深さ	長軸方位	出土遺物	備考（重複関係／堆積土／特徴他）
			長	短				
SK1309	DO124	長円形	2.0	(1.2)	1.3	N84° W	なし	推定金堂基壇を切る。断面フラスコ形
SK1310	DP118	長円形	1.3	(0.9)	1.1	N87° W	なし	
SK1311	DN124	長円形	1.6	1.3	1.1	N75° W	なし	推定金堂基壇を切る。断面フラスコ形
SK1343	DR124.125	長方形	(2.9)	1.6	0.8	N66° W	土器・瓦片多い	SX94を切る
SK1344	DR121	不整円形	0.8	(0.7)	0.4	——	瓦片若干	
SK1345	DS120.121	隅丸長方形	1.5	1.1	0.2	N71° W	瓦片若干	
SK1346	DT120.121	方形	1.2	0.8	0.5	N73° W	土器・瓦片少量	白色粘土粒やや多く含む
SK1347	DT.EA121	方形	1.5	(0.7)	0.5	N12° E	瓦片若干	黒褐色土
SK1348	DT122.123	長方形	1.7	(0.7)	0.9	N85° W	土器・瓦片若干	ロームブロック多く含む。断面フラスコ形
SK1349	EB.EC123	——	(0.6)	(0.1)	(0.3)	——	なし	
SK1350	EC124.125	長円形	1.6	1.1	0.5	N82° W	土器・瓦片若干	黒色土
SK1351	EB125.126	不整円形	0.9	0.8	—	——	なし	未掘
SK1352	EA.EB126	長方形	1.2	(1.0)	0.5	N85° W	土器・瓦片若干	SX99を切る。
SK1353	DT126.127	隅丸長方形	1.5	1.2	0.1	N63° W	なし	未掘
SK1354	DT125.126	方形	1.0	(0.9)	0.2	N87° W	なし	
SK1355	EE125	隅丸方形	1.2	(1.1)	0.3	N10° E	瓦片若干	2時期の重複
SK1356	EA125	隅丸方形	1.0	0.9	0.2	N71° W	瓦片若干	
SK1365	DS.DT121.122	長方形	1.2	0.9	0.9	N50° W	須恵器・瓦片若干	柱穴か、白色粘土少量含む、
SK1366	DP130	方形	1.0	(0.6)	0.5	N90° W	なし	ロームブロック多く含む黒褐色土
SK1367	ED124.125	方形	1.0	(0.6)	0.8	N 0° W	土器・瓦片若干	柱穴か
SK1368	EI130	不整円形	1.4	(0.6)	0.4	——	なし	

土坑一覧（単位はm、確固付き数字は現存量）

業のそれ（65.6～65.9m）とほぼ同じである。

SB140推定金堂掘込み地業の南縁とSB142推定中門掘込み地業北縁間は35.1mある。推定計算した各隅の極地座標値は、北東隅S261.9m,W366.6m、南東隅S271.5m,W367.5m、南西隅S270.36m,W379.95m、北西隅S260.80m,W379.07mで、中心点はS266.15m,W373.25mである。金堂心（S217.01m,W369.42m）からの心心距離は49.289m、同様に尼坊心（S159.15m,W364.65m）からは107.345mとなる。

想定門西妻通りを縦断して、版築土の断割りをしたところ、西妻の柱位置にて版築に先行する方形の柱穴かと思われる落ち込みを確認したが、平成5年度に再調査することとした。



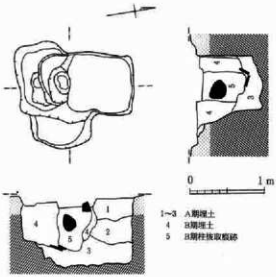
第17図　SB142推定中門跡　掘込み地業断面図

SA20柱列跡

SB142推定中門掘込み地業北縁と平行してほぼ直線上に並ぶ小柱穴列4個（P－3・5・8・9）で、柱間は西から、3.4m＋3.2m＋3.3m。位置と規模からSB142推定中門建設時の足場穴と考えられる。門心からは5.7m、地業北縁からは0.9mの離れである。西から3個目のP－8がほぼ中軸線上である。従い、門の柱位置間に建てたものであろう。これらから、間口3間の門で、屋根の南北規模は11.4mほどと想定される。掘込み地業西縁には無い。

SA18掘立柱塀跡

門跡中央に取り付く柱間2.4m等間の塀で、SB142推定中門掘込み地業心の西7.4mに位置する1個目の柱穴から9間分を確認した。1度の建替えが行われ、全ての柱穴で2期目の柱は抜き取られている。1期目の掘方は短辺0.8～0.9m、長辺1.1～1.2m、深さが確認面（Ⅲc層中）より0.9～1mの長方形の箱形で、門の西3個目までは東西桁行方向に長く、4個目からは南北方向に長い。埋土は1層20～40cmで黒色土と黄褐色ローム土を互層に入れ締める。1期目の柱痕跡は残っていないが、2期目の柱位置とほぼ同位置と考えられ、全て南側からの柱抜き取り穴を利用して2期目の掘方とする。2期目の掘方は不整形で、1期目の底面より浅い。2期目の埋土は雑で、白色粘土を含む。2期目の柱抜き取り穴内には白色粘土を多量に含む。柱穴3・4の2期目の抜き穴には瓦片が多く混入する。柱穴4と6のみを断割りしたところ、柱穴4の2期目の柱抜き取り穴下部に礎盤とした女瓦3点が出土（第27図1）。また同抜き取り穴内上部から均正唐草文字瓦（第21図6）が出土。



第18図　SA18塀跡　柱穴4断面図

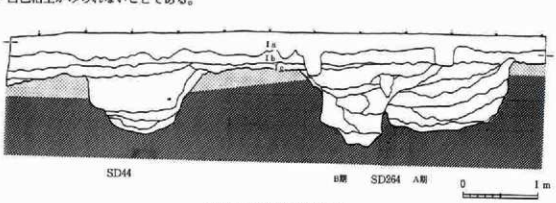
SD44溝跡

SA18塀跡の南、心々6.6～6.8m離れてほぼ平行する中規模の溝である。既検出であり、今回尼寺中軸線の西28mまでの延びが確認された。上面幅1.6m、底面幅1m、深さは確認面（Ⅲc層中）より0.8m。堆積土最下層のロームブロック層が顕著である。

中門掘込み地業推定南縁と溝心とは約1.9mの離れで、上面では空白域は余り無い。中門南面は民有地にかかり、状況は不明である。

SD264 溝跡

SA18塀跡の南、SD44溝跡との間で、塀にほぼ平行する東西溝で、A・B2時期あり、共にSB142推定中門掘込み地業の手前約2m、SA18塀跡柱穴1と2の間から始まって西へ延びる。北の塀側が古く、A期とする。上面幅は2時期合わせて約3m、底面幅はA期が1.2m、B期が0.8～0.9m。深さは確認面（Ⅲc層中）よりA期で0.8mほどで、B期は0.2～0.3mほど深い。底面は平坦でなく、土坑を連続した形態である。A期は塀側より人為的に埋め戻されている。ロームブロックや黒色土の他に白色粘土ブロックが顕著である。B期はその後に開削されたもので、下層はA期同様人為的に埋め戻されている。但し、埋め込みは両側からのようである。A期と異なるのは、白色粘土がみられないことである。



第19図　SD44・264溝跡断面図

都合幅３ｍのトレンチで、須恵器坏小片４点のほか、男瓦片33点（第24図２）、女瓦片46点（第27図２）が出土。Ａ期の上・中・下層とＢ期の上層に多い傾向である。

SD266 溝跡

SA18塀跡の北、中軸線の西28mに設定した幅１ｍのトレンチで検出した東西溝である。南の塀側が古く、Ａ期とする。上面幅は２時期合わせて約3.5m、底面幅はＡ期が１ｍ、Ｂ期が1.5m。深さは確認面（Ⅳ層下部）よりＡ期で0.6mほどで、Ｂ期は0.2～0.3mほど深い。底面は平坦でなく、土坑を連続した形態である。堆積土にはローム粒、ロームブロックが多い。

須恵器坏（第20図３）のほか、男瓦片６点（第24図３）、女瓦片11点が出土。なお、第24図3の男瓦はSK1342上層出土片と接合した。

SK1342瓦溜

SA18塀跡の北、SB142推定中門跡の西に位置する。南北3.6m、東西７m以上の、溝状である。東端はSB142推定中門掘込み地業の西縁と0.8mの離れで、西端は調査区外、南端はSA18塀心より約２ｍの離れである。確認面にて300点近い瓦片が集中している。今年度は遺物の取り上げと掘り下げを行わず、５年度に再調査の予定である。SD266溝跡に比べ瓦片が多いことと白色粘土が含まれており堆積土が異なることなどから瓦溜としたが、堆積土中のロームの多さは共通しており、その位置、規模からみてSD266溝跡の東延長にあたる可能性がある。今年度に調査中断のため無作為で取り上げた上面の遺物は346点で、須恵器坏片1点の他は全て瓦である。345点の瓦の内訳は、鐙瓦２（第21図１、２）、宇瓦２（第21図７）、男瓦59（第24図３）、女瓦183（第26図３）で、この中に文字瓦32点が含まれ、その内訳は押型１、ヘラ書き１、朱墨書30である。

SX103 掘立柱遺構

SA18塀跡の南側、柱穴８と９の中間にある単独の柱穴で、SX95～98掘立柱遺構と共通点多い。掘方は一片1.2ｍの方形で、深さは確認面（Ⅳ層中）より最深部で0.9mである。底面は階段状で、西側が浅い。東端部に柱を立てたと思われるが、大きく抜き取られており、痕跡を残さない。SX95・96、SX97・98のように２本１対のものであるか不明である。

V 出土遺物

出土遺物は4855点を数えた。先土器時代黒曜石剥片1点（SB142西側Ⅳ層下部）と縄文土器1点（SB142版築土内）を除く歴史時代遺物の殆どを瓦類が占める（4724点）。他に土師器、須恵器、土師質土器、灰釉陶器、中世陶器、鉄製品、鉄滓などがある。

遺構出土のものは936点しかなく、内SK1342瓦溜り（確認面）から347点、SK1343土坑から200点で合わせて過半数を超える。

ここでは遺構出土の遺物の中で、土器類と瓦類の主なものを紹介するにとどめたい。

1 土器類

大半が小片で、図示できたのは須恵器坏3点のみである。須恵器坏類は表土出土のものを合わせても還元焔焼成のものが多い。特に金堂前面のSX95～98・100掘立柱遺構、中門地区のSA18塀跡、SD264・266溝跡出土の坏類小片ではほとんどが還元焔焼成である。また底部に再調整あるものは、金堂前面のSX100掘立柱遺構のもの（体部下端から底部周辺をヘラケズリ）と柱穴とも考えられるSK1365土坑のもの（底部周縁をわずかにヘラケズリ、白色針状物質が微量に入る。）の2点のみである。酸化焔焼成の坏類や土師質土器小片は金堂前面のSK1343・1346・1352より出土するのみである。

須恵器（第20図）

3点とも還元焔焼成の坏で、底部の再調整は無い。ただし、3は全体に赤味をやや帯びている。

1はSX96掘立柱遺構A期埋土出土片とSX97掘立柱遺構埋土出土片の接合資料で、底部厚く、体部はやや内彎する。胎土中には白色針状物質が微量に入り、南比企窯産の可能性が強い。法量は復元口径11.7cm、器高3.8cm、底径6.4cmで、口径に対し底径が1／2より大きい。

体部外面中央に横位に「山田」の墨書文字がある。墨書土器「山田」は第1次調査区（四中第1次、国分寺市教育委員会・武蔵国分寺遺跡調査会1981『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅴ』）の他、第83次調査区（尼寺寺域西辺）、第84次調査区（尼寺寺域北辺）、第111次調査区（寺域東辺）においても出土事例が下記のようにある（概報XIV）。

「山田」の墨書

須恵器A（還元焔焼成）坏体部外面（第1次、SI19住居、遺物番号74-9）

須恵器A坏底部外面（第83次、SI208住居、遺物番号83-38）

須恵器A坏底部外面（第84次、SB54掘立柱建物跡、遺物番号84-23）

須恵器A蓋天井部外面（第84次、SX53溝状土坑群、遺物番号84-73）

須恵器A蓋つまみ（第84次、SX53溝状土坑群、遺物番号84-74）

「山□」の墨書

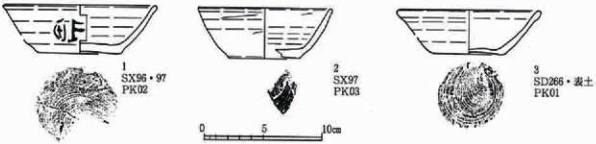
須恵器A坏底部外面（第84次、SX53溝状土坑群、遺物番号84-22、「山田」か）

須恵器A坏底部外面（第84次、SX53溝状土坑群、遺物番号84-25）

須恵器A坏底部外面（第111次、SK569土坑、遺物番号111-12）

以上のように、僧尼寺中間地のSI19住居出土須恵器を除いて全て尼寺寺域周辺出土であることが指摘出来る。「山田」は瓦を含めて、ヘラ書き資料にもない。地名としては、入間郡に山田郷があり、関連するものであろうか。

2はSX97掘立柱遺構埋土出土で、全体に器厚があり、体部が大きく内彎しながら立ち上がる。口唇部肥厚せず、



第20図　出土土器実測図（1：3）

外反もしない。内面の底部と体部の変換点は押さえ付けられ明瞭である。法量は復元口径11.0cmに対して、復元底径5.8cmで口径に対し底径が1／2よりやや大きく、器高は4.2cmで深い。

1・2に類似する資料を窯跡出土須恵器に求めると、南比企窯跡群鳩山窯跡（広町B3号）出土品（『鳩山窯跡群Ⅱ』に、形態、特徴、法量の類似する一群がある。広町B3号窯跡出土の須恵器坏は口径に対し底径が1／2より大きく底部再調整品を含む一群と1／2前後で底部未調整の一群に分けられ、底部の未調整化と小型化に向かい変化し、前者が南比企窯跡群Ⅵ期（9世紀第1四半期後半～第2四半期前半）、後者が同Ⅶ期（9世紀第2四半期後半～第3四半期前半、武蔵国分寺塔再建期）に編年されている（渡辺一1990「南比企窯跡群の須恵器の年代～鳩山窯跡の年代を中心に～」『埼玉考古』第27号所収）。1・2は後者に属し、1が先行するものと思われる。3はSD266溝跡中層出土で、薄い底部から、厚い体部が直線的に立ち上がる。口唇部大きく肥厚する。法量は復元口径11.8cmに対して底径5.5cmで、口径に対し底径は1／2を示す。器高は3.7cm。3は南多摩窯跡群編年G25窯式もしくは北武蔵編年の東金子窯跡群新久D－1号、D－3号窯に比定出来る。

2　瓦塼類

内訳は鐙瓦14点（遺構内5点、以下同じ）、宇瓦11点（7点）、男瓦2101点（397点）、女瓦2531点（458点）、塼55点（4点）、種別不明12点である。

瓦の出土する遺構は多い順にあげると、SK1342瓦溜り(345点)、SK1343土坑（188点）、SD264溝跡（81点）、SX97掘立柱遺構（38点）、SX98掘立柱遺構（28点）、SK1346土坑（22点）、SD266溝跡（17点）、SA18塀跡（16点）、SK1365土坑（15点）、SX100掘立柱遺構（13点）などで、全ての遺構より出土している。

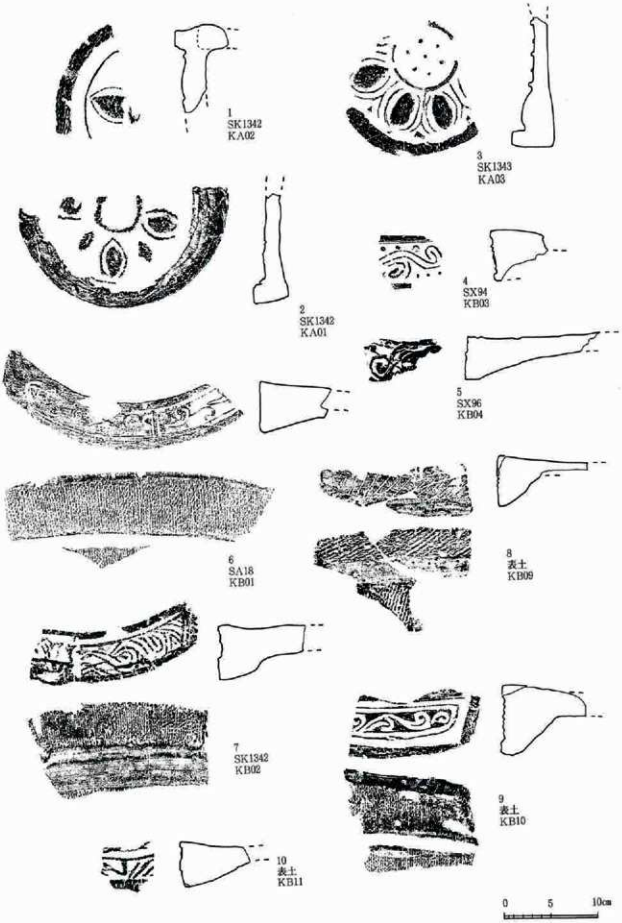
今回は、鐙・宇の文様瓦と文字瓦を中心に図示した。

鐙瓦（第21図）

1はSK1342瓦溜り出土の素弁六葉蓮華文鐙瓦で中房形状不明。2はSK1342瓦溜り出土の素弁四葉蓮華文鐙瓦で、幅広の凸線で界された中房内には蓮子は無く、無文である。3はSK1343土坑出土の素弁八葉蓮華文鐙瓦で凸線で輪郭した平坦な中房内に1＋6の蓮子を配する。男瓦との接合は、1が瓦当裏面上部に溝を付け、男瓦をさしこんで接合し（さしこみ技法）、2が瓦当裏面上部に男瓦をあてて接合し（接着技法）、3が半截前の男瓦円筒にはめこみ不用部分を切り落としている（はめこみ技法）。なお、2には南比企窯跡産の特徴といわれる白色針状物質が顕著に認められる。1・3は灰色、2は青灰色を呈する。

宇瓦（第21図）

4はSX94掘立柱遺構出土の偏行唐草文宇瓦で、段顎、白色の砂粒多く濃灰色を呈する。笵の彫りは細いがシャープである。5はSX96掘立柱遺構出土の偏行唐草文宇瓦で、曲線顎、白色の砂粒多く濃灰色を呈する。6はSA18塀跡柱穴4のB期抜き穴出土の均正唐草文宇瓦で、段顎、白色針状物質を多量に含み青灰色を呈する。文様は不鮮明である。7はSK1342土坑出土の均正唐草文宇瓦で、段顎、細かな白色砂粒を多く混入し濃灰色を呈する。8～10は表土出土。8はヘラ書き文で、一重の圏線で囲んだ中に左下がりの斜線を施したもので、全体に粗雑であ



第21図　出土縁・宇瓦実測図（1：4）

る。やや直線的な曲線顎で、同凸面に斜位の縄目叩きを加える。ザラザラと砂っぽく5㎜ほどの砂粒を少量含む。灰白色を呈する。9は凹線と凸線の組み合わせで唐草文を表現する。10は均正唐草文字瓦。

SX102 掘立柱遺構出土字瓦（第22・23図）

4枚とも完形で、先述のとおり礎盤として用いられていた一括資料である。

第22図1は偏行唐草文字瓦で、瓦当部上弦弧幅24.2㎝、厚さ4.5㎝、女瓦部厚さ2.5～2.7㎝、全長32.5㎝、重量5.04㎏を計る。素材は粘土板。瓦当凸面と凹面が平行する明瞭な段顎で、瓦当凸面と裏面（段部）に丁寧なナデ調整を施す。女瓦の接合は女瓦広端凸面に粘土を貼り厚くして瓦当をつくる（貼り付け技法）。瓦当凸面から女瓦部凸面にかけて部分的に朱がみられる。凸面叩きは細かな格子目。「荏」の押印が女瓦部凸面中央に瓦当面を天にして1個ある。方3.1㎝。胎土に砂粒を多く含む。灰色。

第22図2は偏行唐草文字瓦で、瓦当部上弦弧幅24.8㎝、下弦弧幅26.1㎝、厚さ4.0㎝、女瓦部厚さ2.7㎝、全長40.1㎝、重量5.89㎏を計る。瓦当面の右上隅を横切るような笞割れ痕と接合紐痕跡が認められる。素材は粘土紐。顎は段顎で、瓦当凸面と裏面に丁寧なナデ調整を施す。瓦当凸面から女瓦部凸面にかけて部分的に朱がみられる。瓦当及び女瓦部凸面に瓦笵叩き。粗い砂粒を少量含む。灰色。

第22図1・2は南比企窯跡群久保1号瓦窯跡に同笵資料がある（鳩山町教育委員会1993『久保1号瓦窯跡』）。

第23図1は偏行唐草文字瓦で、瓦当部上弦弧幅26.6㎝、下弦弧幅27.2㎝、厚さ5.2㎝、女瓦部厚さ2.6～3.2㎝、全長38㎝、重量6.6㎏を計る。文様は太く、彫りはしっかりしている。左から右に流れる偏行唐草で、左端に「父」の一文字を横位に配する。右端の珠文痕跡は彫刻時の当たりで、掘り残したものと考えられる。左から3個目と4個目の唐草の中央と右隅珠文の位置の3か所に笵傷がある。素材は粘土板。顎は段顎で、瓦当凸面と裏面に丁寧なナデ調整を施す。凸面叩き痕跡は全面丁寧なヘラケズリにより残されていない。微砂粒と白色針状物質を多く含む。明るい灰色を呈する。焼成は良好で、硬質である。

第23図2は偏行唐草文字瓦で第23図1と同笵である。瓦当部上弦弧幅27㎝、下弦弧幅28㎝、厚さ4.7㎝、女瓦部厚さ2.7～3.6㎝、全長37.3㎝、重量7.13㎏を計る。素材は粘土板。顎は段顎で、瓦当凸面と裏面に丁寧なナデ調整を施す。凸面叩き痕跡は全面丁寧なヘラケズリにより残されていない。微砂粒と白色針状物質を多く含む。表面は黒色、内部は灰色を呈する。焼成は良好で、やや硬質である。

男瓦・女瓦・文字瓦（第24～27図）

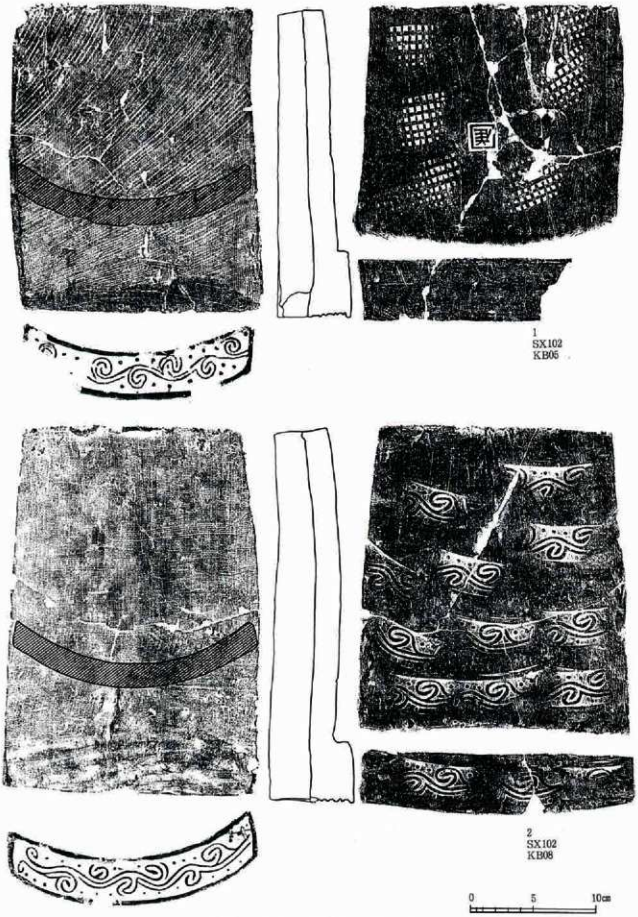
第24図1・2はSD264溝跡、第24図3はSD266溝跡・SK1342土坑、第24図4はSK1343土坑、第25図1はSX94掘立柱遺構、第25図2はSX95掘立柱遺構、第25図3・4はSX96掘立柱遺構、第25図5はSX97掘立柱遺構、他は表土出土。第24図は男瓦、第25～27図は女瓦。

男瓦は有段（玉縁式）のものは無く、全て無段（行基式）で、第24図1・3の素材は粘土紐である。女瓦凸面の叩きは、遺構出土の458点の内縄目が390点、格子目が68点である。第25図1・2は細かな正格子目、同3は粗い斜格子目。3点とも素材は粘土板。

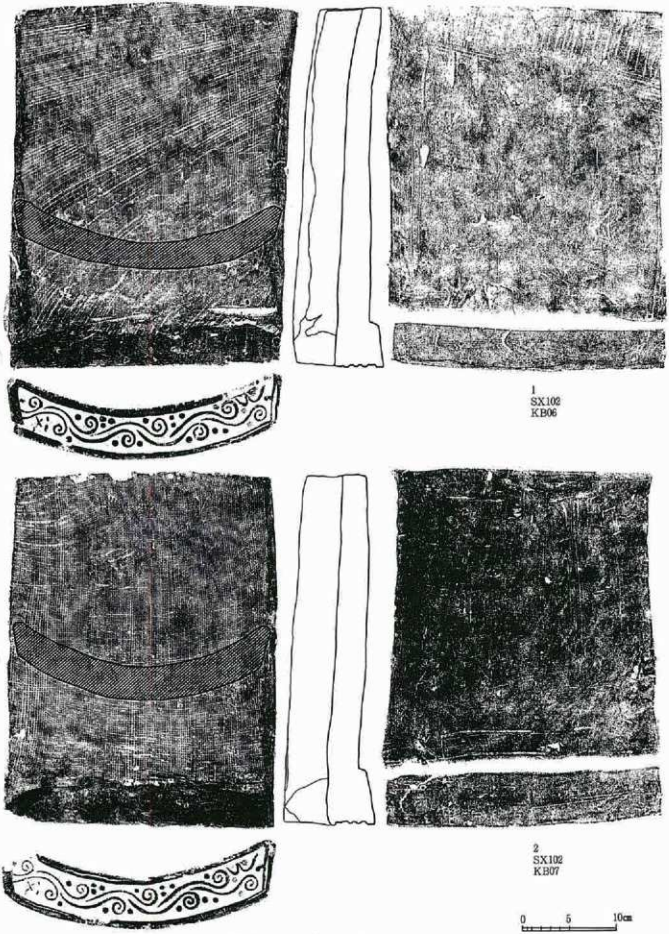
文字瓦は人名、郡名、郷名、その他（内容不明、記号）などがあり、銘記方法として、押印（印を押したもの）、押型（叩き板に文字を彫刻したもの）、横骨（文字を彫刻した横骨型でつけられたもの）、笵（文様の一部に文字を配するもの）、朱墨書などがある。

人名文字瓦は、第24図4が男瓦凹面に「□（刑カ）マ子」とヘラ書があり、同9も男瓦凹面に「□（奉カ）マ知万呂」とヘラ書がある。

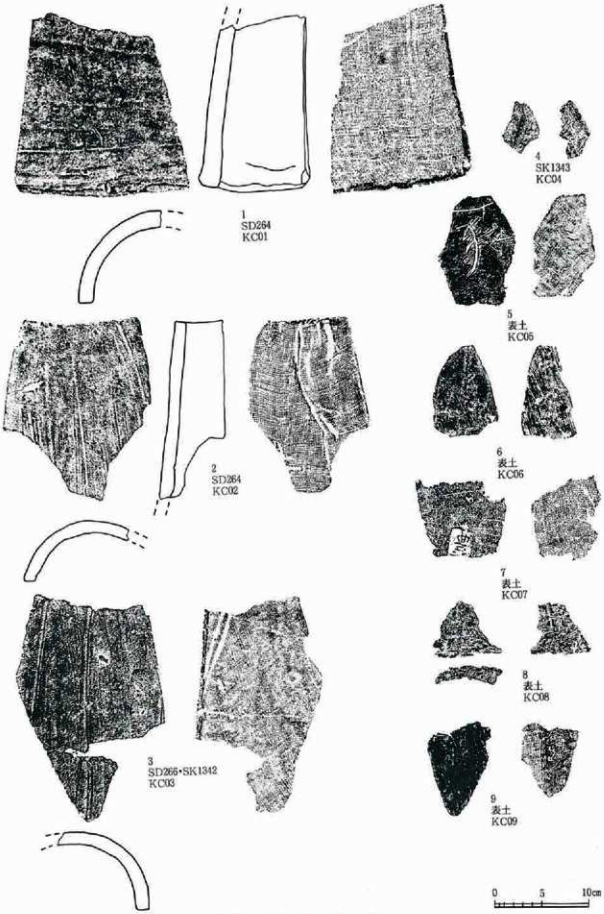
郡名文字瓦は、男瓦郡、豊島郡、児玉郡、那珂郡、荏原郡、秩父郡、榛沢郡、がある。第24図6は凹面にヘラ書「男」、第24図7は凸面に押印「豊」、第25図4は凹面に押印「子玉」の逆字、第25図6は広端もしくは狭端面に押印「中」、第25図7は凸面に押型「荏」、第25図8は凸面に押型「荏」、凹面にもヘラ書「□（荏カ）」、第26図1は凸面に押印「榛」の逆字、第26図4は凹面にヘラ書「荏原」、である。なお、第22図1のSX102掘立柱遺構



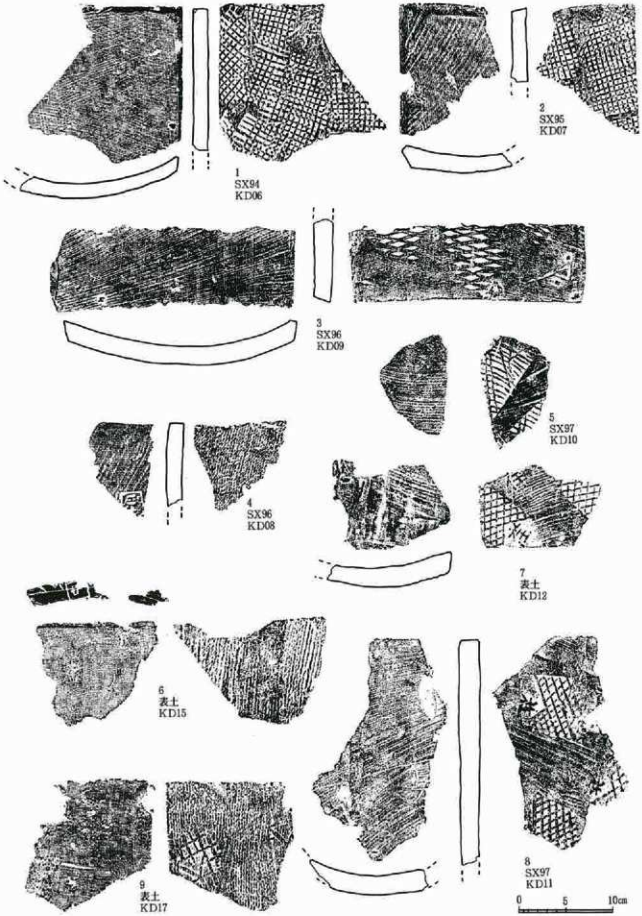
第22図　SX102出土宇瓦実測図(1)（1：4）



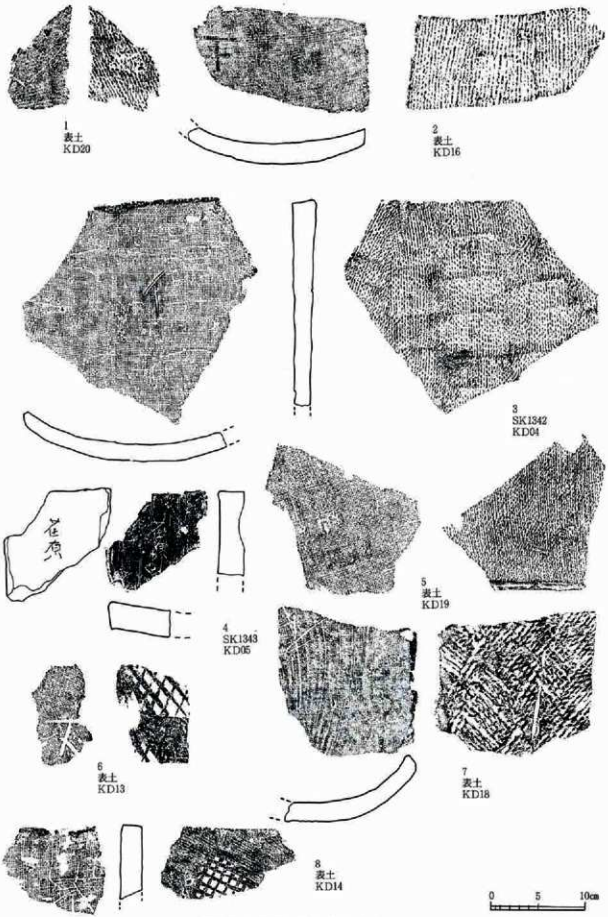
第23図　SX102出土宇瓦実測図(2)（1：4）



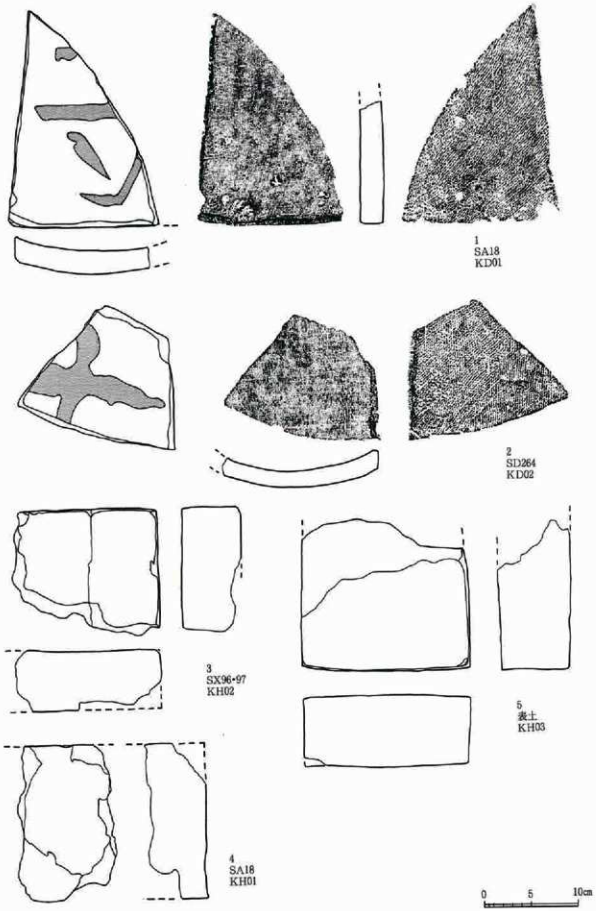
第24図　出土男瓦実測図（1：4）



第25図　出土女瓦実測図(1)（1：4）



第26図　出土女瓦実測図(2)（1：4）



第27図　出土女瓦実測図(3)、出土埴実測図（1：4）

出土の字瓦凸面には押印「荏」が、第23図1・2のSX102掘立柱遺構出土字瓦瓦当面には「父」があるのは既述のとおりである。

郷名文字瓦は、秩父郡美吉郷のものが第24図5で凸面にヘラ書「□（父カ）美」、豊島郡荒墓郷のものが第24図8で端面にヘラ書「荒」、埼玉郡大田郷のものが第25図9で凸面に押型「大□（田カ）」がある。

その他文字瓦及び記号として、第26図2の凹面に逆字の模骨「上」、第26図3の凹面にヘラ書「イ」、第26図5・6の凹面にヘラ書「下」、第27図1・2の女瓦凹面に朱墨書「□（寺カ）」のほか、第24図2・第26図8の不明ヘラ書（凹面）がある。

埼（第27図）

SA18塀跡柱穴から1点、SK1343土坑から2点、SX96・97掘立柱遺構から1点の他は表土出土である。3はSX96掘立柱遺構B期埋土出土片とSX97掘立柱遺構A期埋土出土片の接合資料。一辺12.5㎝以上×14.7㎝以上、厚み6.3㎝で、粘土塊充填技法による。4はSA18塀跡柱穴4のB期埋土出土。短辺14.0㎝、長辺8.8㎝以上、厚み6.0㎝で、粘土板平積技法による。白色針状物質を含む。5は表土出土。短辺17.5㎝、長辺15.8㎝以上、厚み7.8㎝で、粘土板平積技法による。白色針状物質を含む。3点とも長方形と思われる。

Ⅵ まとめ

今年度調査の目的は、中軸線上の主要遺構（講堂、金堂、中門、南大門、中枢部区画南面区画塀、古寺域南辺区画溝）の確認及び中軸線の確定であった。既述のとおり、金堂、中門、中枢部区画南面区画塀については確認でき、あわせて中軸線を確定したが、講堂は確認出来ず、南大門は史跡指定地外に求められることになった。そして、古寺域南辺区画溝とみていた溝は中枢部区画塀に伴うことが判明し、寺域区画に関して新たな課題を招来するところとなった。また、推定金堂前庭部において幡竿支柱とみられる掘立柱遺構などが複数検出されるなどの成果を上げることができた。

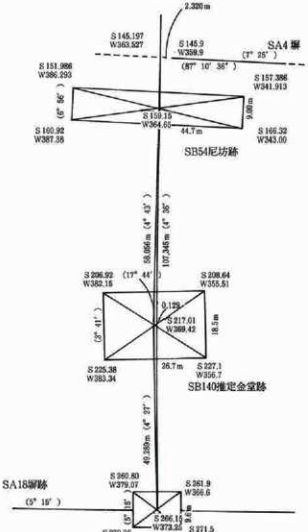
以下に今年度の調査成果を概括してまとめとしたい。

(1) 主要建物の位置・平面規模・標高・構造並びに中軸線について

講堂は、金堂と尼坊間に存するものと考えられるが、僅かの調査では手掛かりが得られず、5年度以降の調査に委ねるところとなった。

第28図は確認された遺構の概念図で、1:100遺構実測図上にて割り出した建物平面をもとに、計算上得た四隅、中心、方位、距離の数値を注記した。SB140推定金堂跡は掘込み地業の四辺を確認出来た。北縁と西縁は後世の削平により部分的にしか確認出来ず、大半を確認出来た東縁線と南縁線は緩やかな胴張形を示している。各辺を満足させるような矩形を復元した。東西26.7m、南北18.5mの規模である。掘込み地業心は$S217.0m, W369.42m$の位置で、SB54尼坊心との距離は58.056mとなり、調査前得られていた数値と変わらない。礎石据付痕跡や基壇化粧の痕跡は削平著しく検出出来なかった。但し、DP118・119区出土の礎石と思われる石の状況からみて、基壇の地上積み上げ部の大きさは掘込み地業の規模に近いものと推測出来る（僧寺金堂では、ひとまわり1.7～2mほど掘込み部が小さい）。版築土は厚さ最大1.6mが遺存していた。版築土確認最高地点は67.45m，掘込み底部（東側）の標高は65.6m であり（西側で65.9m）、基壇東側を基準に、当時の地表をⅡ層上面と仮定すると、当時の地表標高は66.8m、基壇地上積み上げ部高さが0.65m以上、掘込み部深さが1.2mとなる。なお版築土の状況からみて、加わること数十センチ以内で基壇上面になるものと推測される。

SB142推定中門跡は当初南大門を想定していた位置にて検出された。しかも、僧寺中門の坪掘り地業と異なり、掘込み地業であった。その三辺を確認した。南辺は西側が道路下で残存せず、



第28図　武蔵国分尼寺中枢部建物配置図

東側は民有地（宅地）内である。掘込み縁はSB140と異なり嗣張形ではないが、多少屈曲している。SA18塀跡桁方向（B期柱抜き取り穴の位置より割り出した）にほぼ合致している。東西12.5mの規模である。南北はSA18塀跡が門中央に取り付くものと仮定して、9.6mと推定した。掘込み地業心はS266.15m,W373.25mの位置で、SB54尼坊心との距離は107.3456m、SB140推定金堂心との距離は49.289mとなる。版築土は掘込み部のみの遺存で0.2～0.3mであり、掘込み底面はSB140と同じくV層（ハードローム）上面で、標高は65.8mを測った。SB140同様礎石据付痕跡や基壇化粧の痕跡は残存しない。西妻柱の位置の地業下に柱穴状の遺構が確認されたので、前身建物の存在が推測出来るが、結論は5年度の再調査に委ねることにした。

さて、SB54尼坊跡については、昭和39・55年の調査により全体規模が判明している。東西約44.5～44.7m、南北約9mの建物平面で、身舎の梁行2間、桁行15間、南北両廂付きの礎石建である。礎石は現存せず、一辺1.4～1.7m、深さ0.7m（Ⅳ層から）の坪掘り地業を確認している。

今回、SB140推定金堂跡とSB142推定中門跡の規模と位置が確認されたので、あらためて尼坊の位置を図上で計りだしところ、中心はS159.15m,W364.65mとなった。SB54尼坊心、SB140推定金堂心、SB142推定中門心の3点を結ぶと、その誤差はSB140推定金堂心の位置で計算上0.129mであり。ほぼ一直線上に並ぶものとすることが出来る。これをもって現段階の尼寺伽藍中軸線とする。その方位は、極地座標北（僧寺伽藍中軸線）に対して約4度30分東偏である。極地座標北（僧寺伽藍中軸線）は真北に対して6度34分46秒西偏であるので、尼寺中軸線は真北から西偏約2度である。

このように尼寺の主要遺構は中軸線上に中心を合わせて配置されることから、同一計画によることが判明したが、各々の遺構は方位を微妙に違えている。尼寺中軸線の4度30分東偏に最も近いのは、SB142推定中門とSA18塀の東偏5度強とSB140推定金堂の東偏4度弱で、SB54尼坊とSA4塀は東偏7度前後となる。いづれも柱位置や基壇縁でないので誤差の範囲の部分もあるかと思われる。ことにSB140推定金堂については確実性が弱い。だが、SB54尼坊とSA4塀については誤差の範囲をこえており、確実に方位が異なるものとすることができる。この他、尼寺中軸線方位に近いものに、SD44溝南辺が東偏4度である。SD44溝の東辺は尼坊に近く東偏6度30分である。SD34尼寺寺域南辺溝は東偏7度30分である。

国分僧寺と尼寺の各遺構の方位は、現磁北に近い僧寺中軸線に一致する第1群と真北に近い尼寺中軸線に一致する第2群とに大別され、第1群が先行することが判明している。即ち、第1群には創建Ⅰa期（後述）の区画溝（第29図ＡＢＣＤ）が含まれ、創建Ⅰb期（後述）にこの西辺溝（ＤＡ）を埋めて西寄りの伽藍計画に変更され、僧寺の塔を除く主要建物と中枢部区画塀・溝や寺域西辺溝（ＥＨ）がⅠa期の方位を踏襲した。この他に尼寺寺域東辺溝（ＭＮ）などが該当する。第2群には、創建Ⅰb期における尼寺主要建物と中枢部区画塀・溝（ＩＪＫＬ）、寺域南辺溝（ＮＯ）の他、SF1推定古代東山道などが該当する。なお、SF1道路跡の方位は両側溝共東偏約8度30分である。

従って、各建物の方位の相違は築造段階の時間差を反映したものとみられることから、第2群に属する尼寺の主要遺構群の中でも、第1群（僧寺中軸線）にやや近いSB140推定金堂、SB142推定中門と中枢部区画南面施設（SA18塀、SD44南辺）などが、さらに真北寄りのSB54尼坊と中枢部北面のSA4塀やSD44中枢部東辺溝などより僅かに先行した可能性を指摘出来る。

(2) 中枢部区画施設について

調査前においては、尼寺の寺域区画を二重とみて、創建期（国分寺Ⅰ期）の内側区画（SD44溝、ＩＪＫＬ）から再建期（国分寺Ⅱ期、整備拡充期）の外側区画（SD34溝跡、ＭＮＯＰ）へと拡張したものと考えていた。その根拠は、①僧寺金堂と講堂の心心距離にほぼ等しい尼寺推定金堂と尼坊の心心距離約58mの1／2（29m）を1単位とすると、尼寺金堂心の南2単位に内側区画溝が、南3単位に外側区画溝があたること、②外側区画の中軸線交点において、南辺溝を埋め込み通路とした遺構が検出されたものの南門遺構は確認されなかったこと、③外

側区画東辺溝と推定金堂の東延長交点においては、東辺溝を埋め込み通路とした遺構が検出されたものの東門遺構は確認されなかったこと、④さらに同地点における竪穴住居跡との重複から溝の築造時期が9世紀前半代と考えられること、⑤111次調査で内側区画東辺溝堆積土中より武蔵国分寺第Ⅱ期（塔再建期）に位置付けられる土器群が出土しており、同溝はもっぱら第Ⅰ期（創建期）に機能し、第Ⅱ期に至る間に埋没していったものと考えられること、などであった。よって、推定金堂の北1単位に講堂を、南1単位に中門が配置されるものと推測した（概報XIV）。

今次調査により推定金堂の南1単位においては門遺構は検出されず、南2単位のSD44内側区画溝の北側に接して掘込み地業遺構とその中央に取り付く柱間2.4mの東西塀跡が確認された。塀跡の南側（外側）に土坑状に連続するSD264溝の在り方などが、尼坊北方のSA4塀と溝（報告では、SX53溝状土坑群）や僧寺中門西方検出の中枢部区画塀・溝の状況と共通する。僧寺中心伽藍は中門の南翼に延びた柱間2.4mの掘立柱塀（中門西地区の調査では内側に通路状遺構が平行することが確認されており、部分的に回廊の機能を果たしていたと推測される）が金堂や講堂に取り付かず、東西僧坊を含めた範囲（中枢部と仮称する）を区画している。よって、尼寺も同様に回廊は無く、金堂を中心に講堂、鐘楼、経蔵の他、尼坊までを区画するものと考えられるに至った。

中枢部区画施設南面は、1度の建て替えがあるSA18塀跡とやはり1度の掘り直しのある土坑状に連続するSD264溝跡が3m（溝A期）～4m（溝B期）の離れではぼ平行する。SD264溝の築造時期がSA18塀1期まで遡るか否か明らかにし得ないが、SA18塀柱穴2期の埋土とSD264溝A期の埋土の共通性から、少なくともSA18塀建て替え時には開口していたものとみられる。SD264溝は2時期とも大半を人為的に埋め戻していることが明らかである。さらにSD264溝の南側には、同じくSA18塀に平行してSD44溝跡が心心約6.5mの離れで存在する。SD44溝の堆積土はSD264溝のと全く異なる黒褐色土で自然堆積と認められた。僧寺中枢部区画塀の外側にも同様に溝が2条3時期あり、溝心は塀心から南約5m～8mである。従って、尼寺においてもSD264溝跡並びにSD44溝跡はSA18塀に併設された可能性が高い。

SA18塀1期埋土内からは出土遺物は無いが、SB140 推定金堂跡版築土にもみられる黒色土を主とすることから第Ⅰ期（創建期）とみられる。SD44溝跡からの出土遺物も無いが、東辺溝での所見から第Ⅰ期（創建期）に位置付けられる。SA18塀2期の埋土内と抜き穴内出土瓦やSD264溝跡（A・B期）出土瓦の様相に大きな差異は無く、塀の建て替えと廃絶は第Ⅱ期（塔再建期）以降の所産とすることができる。従って、SA18塀1期とSD44溝跡が第Ⅰ期（創建期）、SA18塀2期とSD264溝跡（A・B期）が第Ⅱ期（塔再建期）以降に位置付けられる。

尼寺中枢部の規模は塀心心で南北約121.3m（中軸線位置）、東西推定約87m（金堂位置）と判明した。東辺塀はSD44南辺溝につながる東辺溝が中軸線の東49mに位置するので、南辺に同じく6.5m内側に塀が位置しているものと仮定すると中軸線の東42.5mとなる。西辺塀も未検出で溝も含めて大きく削平されているが、147次調査検出のSD244溝が該当するものと推定しており中軸線の西51mに位置するので、東辺と同じ推測で西44.55mに塀が位置しているものと出来る。因みに、僧寺中枢部は南北130.6m、東西156.2mで、面積で尼寺のほぼ2倍に相当する。SA18掘立柱塀の多くの柱穴掘方の2期埋土内と抜き穴内には白色粘土が多量に混入するのが特徴で、抜き穴内の方がより多い傾向である。この白色粘土は塊で認められる部分もある。従って、柱抜き取りにあたってダイレクトに入るべき位置にあったもので、柱まわりもしくは塀地上部の構成材の一部と考えられる。同じ白色粘土は塊や、こなれた粒となって、他の遺構にも混入している。最も顕著なのがSD264溝跡で、推定中門寄りのA期において、ローム塊とともに塀側より混入した状況を示している。SB142推定中門跡版築土内にも微量であるが認められる。SA20柱列跡（足場穴）にも僅かに混入する。この他、金堂前面のSX96・97掘立柱遺構B期埋土と抜き穴には、SA18塀柱穴と似た状況で混入する。なお、SB140推定金堂版築土内には認められない。この白色粘土は立川ローム層起源の水付きロームと推定されるが（松田隆夫氏教示）、尼寺南方の関連遺跡P地区（推定中門位置から西南約250m付近）において検出されたSX7・8粘土採掘跡の「埋没谷の谷頭に発達した厚さ十数cm

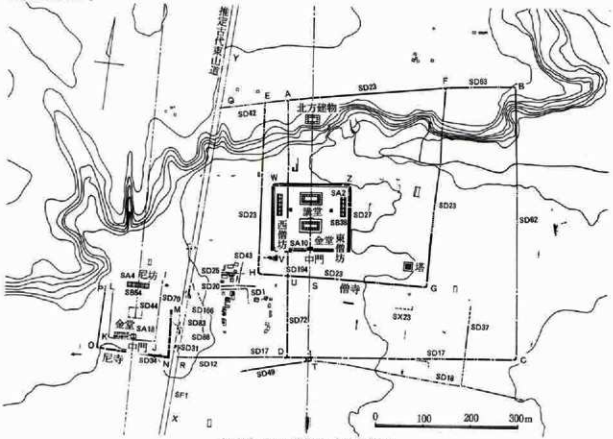
たらずの灰白色粘土層」（早川泉ほか1993『武蔵国分寺関連遺跡の調査Ⅳ』）と肉眼的には良く似ている。また、僧寺中枢部塀においてもこの白色粘土が認められている。現在混入物や鉱物組成につき分析依頼中であり、結果が待たれる。SA18塀の柱径は、25～30cm前後で、当時の地表下に約1.3m近く埋設されたものと推測され、かなりしっかりした上部構造を支え得たものと考えられる。

中枢部区画施設については、塀の上部構造、南側SD264溝の機能や変遷などにつき課題として残されたが、平成5年度に予定するSK1342瓦溜りの再発掘や東辺部の調査をまってあらためて考究していきたい。

次に、寺域区画についてであるが、SD44溝が古寺域区画ではなく中枢部区画施設に伴うことから、新寺域区画とみていたSD34溝跡（中軸線上で推定金堂心から南83m）のみが該当することとなった。その設置時期は前述の通り、第68次東辺溝地点の調査所見（未報告、概報XIVで触れられている。）によれば、9世紀前半代ということになる。しかしながら、竪穴住居出土の僅少な資料という限界もあるので、再検討を要する。仮にこの資料を除外して、同溝の設置時期を第Ⅰ期（創建期）とすると、南門は第45次（第346次で再調査）地区で検出されたSD34溝を埋め込み通路とした遺構の北側（民有宅地のため未調査）に想定されるのである。

僧寺は創建Ⅰａ期区画ＡＢＣＤの西辺溝を埋め、且北辺を大部分利用して創建Ⅰｂ～Ⅰｄ区画ＥＦＧＨ区画へと寺域を変更するが、古寺域区画の東側ＦＢＣＤは存続して開放状態であり、第Ⅱ期において、東山道を西辺として（Ｒ地点第317次調査で道路東側溝と重複を切ることから再検討が提唱されている、有吉重蔵1990『武蔵国分寺』『考古学ジャーナルNo. 318』）北辺ＥＱと南辺ＤＲを小溝で延長しＱＢＣＲの広大な範囲を区画した（ＥＦＧＨの伽藍が配置される寺域区画に対して、寺地区画と仮称する）。

従って、調査前SD34溝ＭＮＯＰについては第Ⅱ期において寺地南辺ＤＲ小溝の延長に併せて設置されてものとみていたわけであるが、同溝を第Ⅰｂ期まで遡らせると、ＣＤの延長でＮ点が決められて尼寺寺域区画が設置され、後に寺地南辺ＤＲ小溝をもって閉じたとすることができる。南門が未発見の現段階では決め手は無く、今後の課題としたい。



第29図　武蔵国分僧寺・尼寺全体図

(3) 推定金堂前磨部検出の掘立柱遺構群について

SB140推定金堂跡の前面とSA18中枢部区画塀の前面にて、通常の建物遺構とは異なる掘立柱遺構を複数確認した。SX94～103の10本である。この内、SX94、SX102、SX103 は単独、SX95～98と、SX99～101は２本１対のものが中軸線を挟んで東西に２基（SX101の対は未検出）という配置で、SX99～101が先行するものとみられる。近年各地の寺院跡などで類似遺構が検出されており、幡もしくは幢の竿を立てた跡と目されている。

まづ、１本柱のものであるが（A類とする）、SX94は中軸線の西側から１m以内で、推定金堂掘込み地業南縁より5mほどの位置であることと、堅固な埋土と柱根元の固定痕跡かとみられる壁に穿たれた穴などからみて、相当に高い柱か重心位置の高い構造物を支えていたものと考えられることから、灯籠竿もしくは幢竿の跡とみられる（灯籠竿とするとその位置と掘方の向きが中軸線に合わないなどの問題点がある）。同様な例では、奈良県高市郡明日香村奥山久米寺の金堂と塔間の参道上中央検出の１本の柱穴が灯籠竿もしくは幢竿の跡とみられている（奈良国立文化財研究所1988『飛鳥・藤原宮発掘調査概報18』）。

次に、SX102は同じくA類の１本柱であるが、柱径が根元で約50cm前後あり、当時の地表から2m近く埋設したもので、礎盤を用いたものであることから、SX94以上に高い柱と考えられる。中軸線の東1mほどで、推定中門の掘込み地業北縁の北9mほどに位置しており、完全な４枚の宇瓦の瓦当面を全て西及び南へ向けて揃え礎盤として埋設する特別な状況を勘案すると、幢竿としても特別目重要なもので、あるいは他の構造物を考慮しなければならない。このような巨大な１本柱は武蔵国分寺跡で３例目である。２例はいづれも僧寺寺域内西南隅（中門西南方）検出で、内１例には４本の小支柱が付属するものとみられる。他遺跡では、平安末期の例であるが、岩手県毛越寺金堂円隆寺跡の前面の大泉ヶ池の汀線の沿って、５本の巨大な柱根（直径40～50cm）が検出されている（岩手県平泉町毛越寺、平泉町教育委員会1986『特別史跡　特別名勝　毛越寺庭園発掘調査報告書－第７次調査－』）。主柱の周囲に８本の副柱穴が巡るものが２本、対峙する２本の副柱穴がある物１本、副柱穴の無いもの２本で、主柱穴掘方は全て匙形（埋設時に必要な掘方）を呈している。柱根の深さ（2.8m）からその高さ数10mと推定され、『浄土曼荼羅図』に描かれる宝樹もしくは幢、あるいは相輪塔や笠塔婆の一種とされている。SX102においても主柱穴部分にむかって階段状の傾斜面を残す掘方で、側方に掘方底面より0.7mほど上がった作業帯を設けるなど巨木埋設のための工夫がこらされている。

次に、SX95～98と、SX99～101など２本１対のものであるが、この種の類似例が最も多い。２本の柱穴は主柱跡（竿）ではなく、その支柱跡と考えられるものである。主柱と支柱がセットで検出された例（B類とする）としては平城宮跡第二次大極殿前面に東西に並んで検出されたSX11252～11258などがあげられる。その掘方は南北1.5m、東西3.2～3.6m程度の不整楕円形で、内部に３個の柱抜き取り痕跡がある。抜き取り痕跡はほぼ等間隔で、両端の痕跡間隔は2.2～2.5mほどである。７個の掘方はその位置と数からみて、元旦朝賀等に立てられたと考えられる烏形・日像・月像の幢と朱雀・玄武・青龍・白虎の幡の跡と見られている（奈良国立文化財研究所1984『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）。２本１対のものは、B類から主柱の痕跡が抜け１個の掘方内に柱穴が２本のもの（C類とする）と、２個の掘方のもの（D類とする）に分けられる。

C類には奈良県高市郡明日香村紀寺例（奈良県立橿原考古学研究所1978『明日香村紀寺跡発掘調査概報』）と奈良県桜井市山田寺跡例がある。前者は金堂と中門間に西側に位置し、東西４m、南北1.6mの方形の掘方内に心心2.05mで掘立柱が東西に並ぶ。後者は南門南方検出のSX605で、東西2.1m、南北1.5mの掘方内に心心1.2mで柱抜き取り穴が東西に並ぶ。

D類には奈良県御所市巨勢寺跡講堂背後（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1989『大和を掘る　1988年度発掘調査速報』）、静岡県磐田市大宝院廃寺遺跡例（静岡県埋蔵文化財調査研究所1993『静岡の原像をさぐる』）、東京都府中市武蔵国府跡例（塚原二郎1989「武蔵国府－京所国丁推定地の調査」『東京都遺跡調査・研究発表会14発表要旨』）などがある。この内大宝院廃寺では、2m近くの掘方に直径50cmの柱を立てるもので、柱根と礎盤

（板材）が残っていた。2本の心心距離は3m前後。また、武蔵国分僧寺跡でも塔南方で長方形の掘方2個が南北に並んで確認されている（概報XXとして近刊予定）。ただ、間隔が5m近くあるので、A類かもしれない。

今回検出されたSX95～98と、SX99～101はD類で、SX95とSX96、SX97とSX98、SX99とSX100が対になる。SX101の相方は攪乱坑中に礎かに掘方痕跡とおぼしき部分をとどめるのみである。各々の心心距離はSX95とSX96が約3.2m、SX97とSX98が約2.4m、SX99とSX100が約2.7mである。SX95～98はAB2時期あり、B期も抜き取られている。掘方は長方形で、短辺1～1.2m、長辺1.2～1.5m。深さは0.4～0.8mと浅い。掘方北側壁の立ち上がりは緩やかであるのに対し、南側は深く、且オーバーハングしている。B期の抜き取り穴は南に張り出すが、オーバーハング部分にも及んでいることから、掘方底面近くにおいて柱根元を支える構造材が用いられていた可能性がある。このことのためか、SX99～101では柱痕跡も柱抜き取り痕跡も良く残っていない。なお、SX103は1個のみの検出であるが、形態等SX95～98に酷似しており、D類に含められる。

この他に小さい規模の1本柱（列）の場合がある（E類）。SX94～101掘立柱遺構周辺検出の小柱穴はSX95～98に並行してやや規則的な配置が看取されることからみて、各々が主柱で列状に並ぶ可能性を残す。

ところで、山岸常人によれば、寺院における法会は仏堂内部で行うもののほかに、前庭や回廊・中門を会場とするものがあり、後者の庭儀法会では前庭に舞台や高座・礼盤を設置し、法要や法楽の芸能の場とする。この前庭や周囲を荘厳にするために幡や幢を立てる（1991「発掘寺院の建築」『季刊考古学第34号』）。

『四天王寺御手印縁起』には、宝幢四基、二本は回廊の東西、一本は回廊の乾角（北西）、一本は回廊の艮角（北東）と記載され、『西大寺資財流記帳』では、幢六條、云々と記載があるなど、古記録にも散見するが、まだまだその実態については不分明の点が多い。従来の伽藍の調査では空間地の調査に及ぶことが少なかったし、この種遺構が検出されていても、柵列や特殊な建物遺構とされていたケースもある。

今回、尼寺推定金堂の前面において特殊な掘立柱遺構群が複数発見されたのであるが、この内D類とした2本1対のSX95～98と、SX99～101掘立柱遺構はまさに、庭儀法会に伴い立てられた幡や幢の跡とみられるが、A類とした1本柱のもの（特にSX102）については他の構造物の可能性を含めて検討していく必要がある。また、僧尼寺の金堂前庭部の規模を比べると、尼寺SB140推定金堂跡掘込み地業南縁から SB142推定中門心（SA18中枢部塀心）まで約40m、中枢部塀東西長推定87mを測り、僧寺の場合は金堂基壇南縁から中門心（SA10中枢部塀心）まで約37m、中枢部塀東西長156.2mと測り、東西僧坊部分を除くと、ほぼ同じ規模となる。このことから、一定空間の確保という意図が働いていたとみれるのではなかろうか。伽藍配置の基本単位についてもこうした観点からの再検討が要される。

(4)遺構の年代について

武蔵国分寺の変遷は寺地・寺域区画の変遷と検出遺構群出土遺物の検討を通して、3期に区分してとらえている（『国分寺市史』上巻ほか）。Ⅰ期は創建期（8世紀後半）、Ⅱ期は塔の再建を中心とする整備・拡充期（9世紀代）、Ⅲ期は衰退期（10・11世紀代）。創建期瓦の検討等から、天平13年（741）に着手された以降天平宝字年間の完了に至る武蔵国分寺の造営過程は三小期（Ⅰa～Ⅰc）に区分される（有吉重蔵1993「武蔵国分寺の創建期瓦」『考古学ジャーナルNo.364』ほか）。創建Ⅰa期は天平13年の詔発布直後に、第28図ABCDの長方形区画が設定され、造営に着手したと考えられ、区画溝以外に当期の確実な遺構は発見されていない。創建Ⅰb期は、その後二寺の伽藍計画に変更され造営が進められた天平感宝元年（749）～天平勝宝7年（755）、創建Ⅰc期は、二寺の造営完了期で、天平勝宝8年（756）～天平宝字8年（764）と考えられている。創建期瓦はⅠa期が最古に位置付けられる上野系と国府系、Ⅰb期には素弁八葉蓮華文を基本意匠とする在地系及び文字瓦が伴い、Ⅰc期には平城宮系瓦が伴う。尼寺には上野系が全く出土せず、国府系と在地系のものが出土するが、国府系瓦の資料は脆弱であるので、他の様相からみて尼寺の創建時期はⅠb期で、「僧寺にやや遅れて着手したものと考えられる」（有吉前掲著）。SX102掘立柱遺構に礎盤として用いられていた4枚の字瓦（第21・22図）は在地系で、Ⅰ

b期の好資料である。

ただし、尼寺には在地系の中でも勝呂廃寺系の素弁八葉蓮華文鐙瓦が出土（第84次、SA4堀北側のSX53溝状土坑群、概報XIV－図面21－84-109）しているが、同笵瓦が創建Ⅰa期区画西辺溝より出土していることから、Ⅰa期に僧寺と尼寺がセットで計画されたとすることもできる。この点を明らかにする資料は得られなかった。

4年度調査で確認された金堂・中門地区の遺構の内、もっぱら堆積土などの所見を含めて考えると、創建期に含められるのは、SB140推定金堂跡をはじめ、SA18塀跡Ⅰ期、SD44溝跡、SX99～101掘立柱遺構、SX102掘立柱遺構などで、SB142推定中門跡については前身建物が下層にあることも考えられ、保留としておく。他の遺構の内、SB140推定金堂跡版築土より掘り込まれるSK1309・1311土坑やSK1310・1343土坑などは尼寺廃絶後のものとみられるが、以外は第Ⅱ期以降Ⅲ期までの所産と位置付けられる。国分寺Ⅲ期前半に伴う土器群は酸化焔焼成須恵器が大半で、後期には土師質土器が主となるが、今年度調査区では破片が多く良好な資料に恵まれなかったが、その中でも還元焔焼成須恵器が多くを占め、土師質土器はほとんど無いという状況であることから、これら遺構の時期はⅡ期から、下ってもⅢ期前半と考えることができる。この点、Ⅲ期後半の土師質土器を多く出土する僧寺の金堂地区とは大きく異なり、尼寺の廃絶時期が僧寺よりも早く、Ⅲ期前半（10世紀代）にもなり得ることを示している。設置時期は不明であるが、尼寺の中枢部の西側を南北に鎌倉街道が貫き、中世以降の土地の改変が始められたと推測されるが、SB140推定金堂跡版築土より掘り込まれるSK1309・1311土坑なども関連するものであろう。地表に推定金堂の基壇のみを残すこととなった尼寺伽藍跡転変の始まりが窺われる。

図版 1

1　武蔵国分尼寺付近航空写真（南から）

右上　JR西国分寺駅
右下　市立第四中学校
中央　JR武蔵野線，都道府中街道
左上　都立府中病院

2　調査区全景垂直写真

1　調査区全景（東から）

2　SB140推定金堂跡（東から）

図版 3

1　SB140推定金堂跡版築土

2　SB140推定金堂跡残存土壇上の状況

3　SB140推定金堂跡掘込み地業立上がり

4　DP118・119区礎石状況

1　金堂前面地区全景（北から）

2　SX94掘立柱遺構東西土層断面東半部（南から）

3　SX97掘立柱遺構南北土層断面（東から）

4　SX102掘立柱遺構（南から）

5　SX102掘立柱遺構南北土層断面（西から）

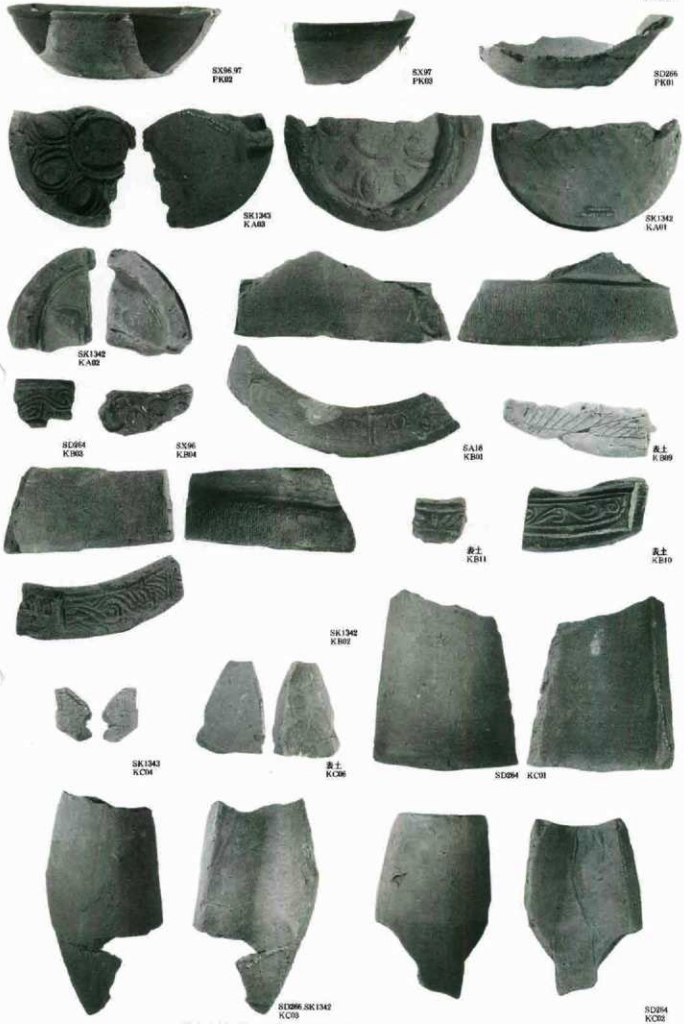
1　中門地区全景（北から）

2　SB142 推定中門跡掘込み地業断割り

3　SA18塀跡柱穴4南北土層断面北半部（東から）

4　SD264溝跡南北土層断面（東から）

5　SD44溝跡南北土層断面（東から）



出土土器・鐘瓦・宇瓦・男瓦　（土器のみ1：3、他は1：4）

SX102
K1865

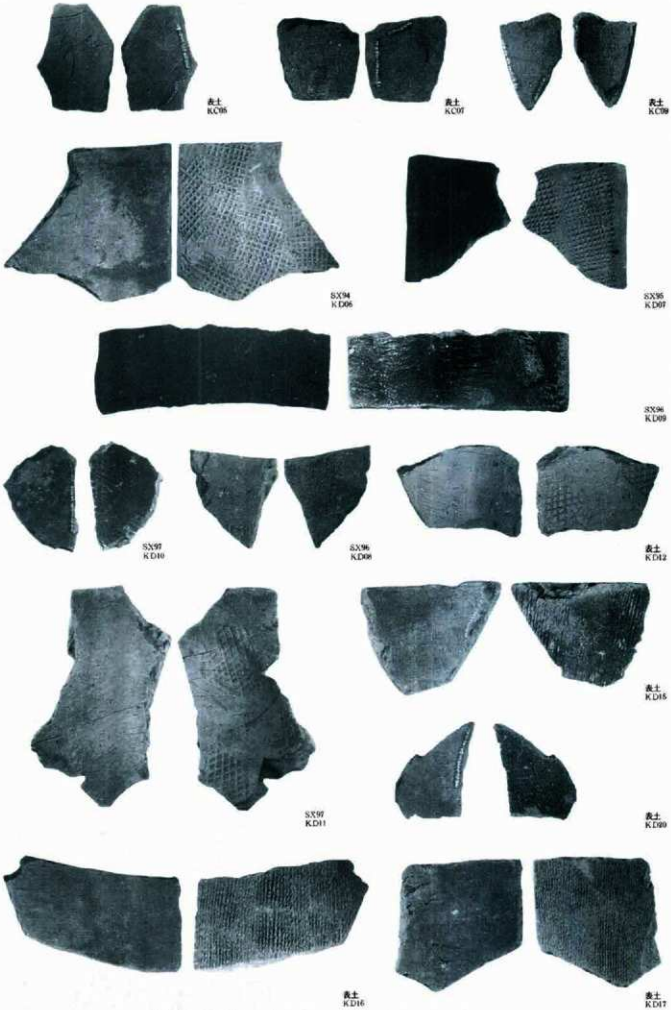
SX102
K1868

SX102出土宇瓦(1)（1：4）

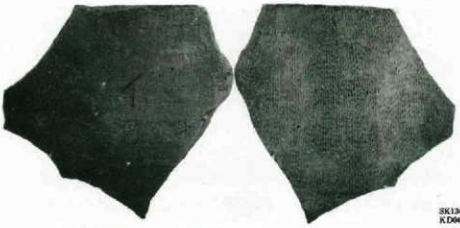
SX102
KB06

SX102
KB07

SX102出土宇瓦(2)（1：4）


表土
KC06
表土
KC07
表土
KC08
SX94
KD06
SX95
KD07
SX96
KD09
SX97
KD10
SX96
KD08
表土
KD12
表土
KD15
SX97
KD11
表土
KD09
表土
KD16
表土
KD17

出土男瓦・女瓦（1：4）



SK1342
KD04

表土
KD13

SK1343
KD05

表土
KD14

表土 KD19

表土
KD18

SA16 KD01

SD264
KD02

SX96.97
KH02

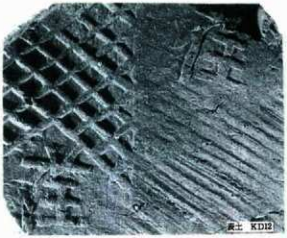
表土
KH03

SA18
KH01

出土女瓦・埠（1：4）

SX96/97 PK02

SX97 KD11



表土 KD12

表土 KD17

表土 KD16

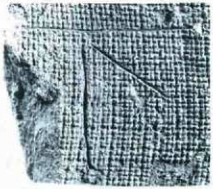
表土 KD13

表土 KD18

SK1343 KD05

表土 KD14

SX97 KD11



表土 KD19

SK1342 KD04

出土文字資料集成(1)（1：1）

表土 KC95

表土 KC98

表土 KC99

表土 KC05

SX102 KB08

SK1343 KC04

表土 KC07

表土 KD15

表土 KD16

SX96 KD08

出土文字資料集成(2)（1：1）

国分寺市文化財調査報告　第39集

武蔵国分尼寺跡Ⅰ

平成4年度発掘調査概報

発行日　平成6年3月31日

編著者　国分寺市遺跡調査団

©（団長　吉田　格）

発行所　東京都国分寺市教育委員会

〒185　国分寺市戸倉1-6-1

TEL　0423-25-0111㈹

印刷所　望洋印刷株式会社

令和3年(2021) 9月8日　デジタル版作成

表紙　出土文字瓦拓